



Title	繊維都市・地域住民層の生産・労働―生活過程／家族と町内会組織
Author(s)	布施, 晶子
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 8, 55-87
Issue Date	1985
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/24249
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_P55-87.pdf



繊維都市・地域住民層の生産・労働—生活

過程／家族と町内会組織

布施 晶子

はじめに

本小論では、「繊維産業のまち」児島で生活する人々の、家族（世帯）を単位とする生活のレベルまで下りて、地域産業変動にともなう住民生活の変貌の実相をあきらかにするべく試みる。

徳川幕藩体制下からの機業のまちとしてきこえる児島において、繊維産業と、いまひとつの地域産業の塩業そして漁業の盛衰が、地域住民の生業史、生活史を大きく変化させてきたことは容易に把握される。明治以降、基本的には日本資本主義の発達に規定された地域産業変動の波のもとにあつて、児島の地域住民も、あるときは主体的に、あるときは従属的に、自らの生活を防衛するための営為を展開して今日に到った。そして、この生活防衛のための営為は、児島の地域住民の祖父の代、親の代、子の代の生活史にくっきりと刻印されている。地域産業変動が地域住民の生活史に刻みこんだ生活防衛の歴史を、地域社会への根づきの過程を中心に的確に把握するという課題が本小論の第1の課題である。

第2に、地域住民の就業構造を中心とする生活防衛の営為を把握するにあたり、特に女子型といわれる織物、さらには縫製加工を中軸にその生業を展開してきた地域の特徴として、いわゆる多就業形態、さらには、日本資本主義発達を支えた軽工業の宿命としての長時間労働が、いまなお、その生活構造を規定しているのではないかという問題の追求が第2の課題である。

第3に、家業的経営およびその延長線上の中小企業経営を中軸とする地域における、地域社会の支配層の問題がある。資本主義発達に波にのり、自らの家業を隆盛の機運に導くには、家業の担い手である世帯員の骨身を惜しまぬ努力に加えて、業主の、機をみるに敏な創意工夫がいる。そして、それがひとたび成功したあかつきには、彼は、一族の、そして又地域社会の成功者となり、地域社会の支配層、リーダーとしての位座を獲得する。指摘するまでもなく、地域産業変動の盛衰は、地域社会の支配層の盛衰に連続していく。こうして、家業的経営を中軸とする地域ほど、これと結びついた地域名望家層支配が把握されるのではないかという問題意識がうかびあがる。

第4に、児島の地域住民の行動と意識にみる「自然都市」児島の存在についてである。三市合併後、16年余をへた現段階において児島の住民は倉敷市民としての意識を色濃くもつのか、それとも児島の住民としての意識を色濃くもつのかという問題である。繊維産業に特化される単一産業従事者がいまなお多数をしめ、かつ地理的にも倉敷市街とは隔絶し

た位置にある児島の住民は、いまなお倉敷市民としての意識よりも児島住民としての意識を色濃く内包しつつも、地域産業そして地域社会の漸次的変化のもとでその漸次的変容を遂げつつあるのではないかという問題意識の検討が課題としてうかびあがった。

こうした基本的な問題意識を基礎に、具体的には、倉敷市児島琴浦地区下の町0自治会第一班20戸を対象とするインテンシブな面接調査の分析を行った。分析の中心は、(1)地域社会への根づきの過程、(2)就業構造にみる特徴、(3)地域社会構造の特徴と血縁・地縁のネットワークの関わり、(4)水島コンビナート建設、三市合併、本四架橋等に対する評価の四点におかれる。

以下、分析に入る前提として、すでに、前稿までにおいて詳細に展開された点であるが、本論の展開に必要な限りにしぼって、児島地区の産業および就業者等の特徴についてまとめておく。

第1に、産業構造についてみるならば、縫製、織物、染色の繊維産業を中軸になりつつ地域である。昭和55年の国勢調査によると、地域の全就業人口40,861人の45.9%にあたる18,769人が製造業従事者であるが、その過半が繊維関連の製造業就業者である。昭和35年段階では27,369人、全就業者の62.8%が製造業就業者であったこと、以下、昭和45年56.8%、昭和50年50.5%、そして昭和55年の45.9%と漸減傾向を示しつつあることをふまえるとき、児島地区の就業者にしめる繊維関連製造業就業者の割合は減少しつつあること、これにかわって、卸売、小売業やサービス業を中心とする第三次産業の割合が高まりつつある傾向がたしかに把握される。しかし、地域の産業構造において、いまだに第二次産業の割合が5割を越すのは、四極の多核構造のなかでも児島地区のみであり(児島54.3%、水島50.0%、玉島44.5%、倉敷40.7%)、先にも指摘したように、その大半が縫製を中心とする繊維産業であることをおさえるとき、「機業のまち」「繊維のまち」「縫製のまち」児島の呼び名がいきる地域とおさえられよう。昭和56年度の事業所調査基本調査区名簿(5分の1抽出)の分析によっても、製造業事業所は児島地区の事業所の40.0%をしめ、実にその86.9%が繊維、衣料の繊維産業関連事業体である。

第2に、就業者中にしめる女子の割合がいちじるしく高い地域である。国勢調査の資料によると、昭和35年段階、児島の全産業就業者の58.0%は女子である。この割合は、その後漸次減少傾向をしめすが、昭和55年段階でも全就業者の49.6%を女子がしめる。そして、その主因は、昭和35年段階の70.8%から昭和55年の49.6%へと漸減傾向を示しつつも、なお主力をしめる製造業従事者の女子就業者の割合の高さに求められる。昭和35年段階では、倉敷市全体の女子就業者の6割強が児島の女子就業者によってしめられていた。昭和55年段階では4割強と減少したが、倉敷2.5割、玉島1.8割、水島1.2割、庄・茶屋町0.5割と比較するとき、児島がいかに女子の働き場の多い地域であるかが指摘できる。

第3に、従業上の地位別にみると、玉島と並び、自営業者および家族従業者の割合が高い地域である。昭和55年の国勢調査の結果によると、自営業者の割合19.5%は、倉敷13.6%、水島11.7%、玉島17.3%を上まわり、家族従業者の割合7.7%も、玉島の9.1%について高い(倉敷6.5%、水島5.9%)。その分、雇用者の割合が低いわけで、水島で79.1%、倉敷で77.2%を示すのに対し、児島の70.2%は玉島の71.1%と並んで低い割合を示す。

この点と関連して、第4に、児島の世帯類型の特徴にふれなければならない。周知のように、世帯業態と世帯類型の間にはプラスの相関がみられる。たとえば、昭和52年の厚生行政基礎調査によると、「核家族世帯」の割合は雇用者世帯において高く（66.4%）、農耕世帯（33.1%）の約2倍をしめす。一方、「三世代世帯」の割合は農耕世帯において高く（52.5%）、雇用者世帯ではその5分の1近く（11.2%）にすぎない。都市的自営業者世帯はその中間に位置し、たとえば「三世代世帯」の割合は20.1%と雇用者世帯の約2倍の割合をしめす。

いま、住民基本台帳による住民票一覧の分析（昭和58年）によって、児島の世帯類型の特徴をみると、夫婦家族世帯（「核家族世帯」）が60.8%、直系三世代を中心とするその他の親族世帯が19.9%であり、たとえば、これを雇用者世帯の多い水島地区の世帯類型——夫婦家族世帯63.2%、その他の親族世帯15.6%——と比較するとき、直系三世代を中心とする親族世帯の割合が高い地域であることがわかる。同時に、自営業者や家族従業者の割合の高い玉島も、夫婦家族世帯の割合が低く（58.9%）、その他の親族世帯の割合が高い（27.4%）。

第5に指摘しなければならないことは、地域社会への根つきに関して、比較的居住年数の長いものが多いという傾向である。たとえば、昭和44年、市の企画調整部広報広聴課が行った「市民の声」アンケート調査の結果（倉敷地区、児島地区、玉島地区計2000名配布、54.7%の回収率）をみると、「あなたのお宅では倉敷市へいつごろからお住みですか」という問いに対して、昭和20年以前からという回答をよせたものは児島の68.9%が一番高い。ついで玉島が62.2%、倉敷が42.5%と続く。同様の調査を昭和56年の資料でも（市企画部広報広聴課「市民の声」アンケート）、昭和20年以前から現在地に住むものの割合は児島が46.9%とトップをしめる。第二位は玉島で41.1%、倉敷の28.9%、水島の25.8%との間に大きな差がある。

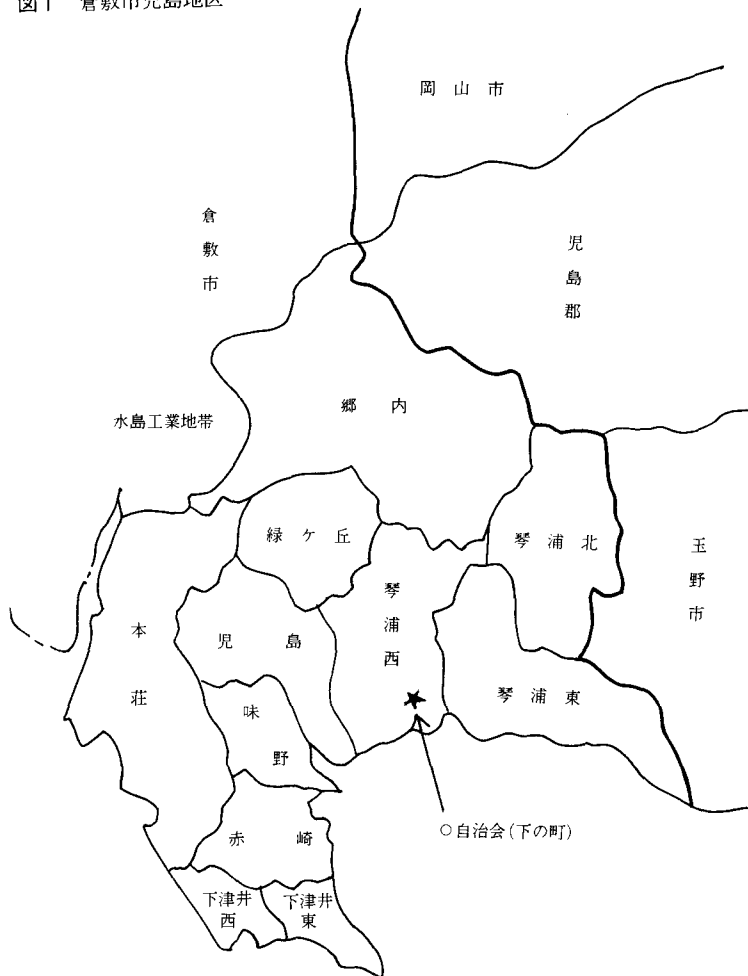
I 地域社会への根つきの過程

1 調査対象地域の特徴

さて、以上のような地域の特徴をもつ児島地区のなかでも、今回、我々が調査対象地域として選定した〇自治会が位置する児島下の町（図1）、かつての下村は、1889年（明治22年）、倉敷紡績の設立にあたり、男女の技術伝習生が派遣された下村紡績所（1880年、〈明治13年〉設立、1882年〈明治15年〉操業開始）のあった地域であり、日本の繊維産業の歴史が刻みこまれた草分けの地域である。

江戸時代からの自然村、下村と隣村の上村が合併して鴻村となったのが1889年（明治22年）、1907年（明治40年）には、さらに隣村の田之口村と合併して琴浦村となり、1915年（大正4年）の町制施行で琴浦町と変更、1956年（昭和31年）に児島市と合併、1967年（昭和42年）の三市合併で倉敷市に編入という歴史をもつ地域でもある。⁽¹⁾

図1 倉敷市児島地区



いま、倉敷市歴史年表編集委員会編集の『倉敷市歴史年表』（倉敷市教育委員会，昭和53年）および、『児島機業と児島商人』（角田直一著，児島青年会議所，昭和50年）巻末の児島機業・縫製業略年表から，児島，特に下村，琴浦村・町，そして下の町にかかわる歴史を抜粋すると，表1のような年表がつけられる。⁽²⁾そこには，児島三白といわれる主産物（いかなどに代表される魚の白，塩の白，そして綿織物の白）のなかでも織物を中心にいってきた地域の特徴がうかがいあがる。児島の機業史については，何冊かのすぐれた著作が問われているが，たとえば，昭和57年，倉敷の自然をまもる会が編集した『児島風土記』には，きわめて簡潔に機業のまち児島の歴史が叙述されている。それは下の町の歴史でもある。

表1 児島下の町歴史年表

年	児島下の町（下村、鴻村、琴浦村、琴浦町、児島市琴浦町、倉敷市児島下の町）の歴史
1731 享保16	藩は木綿の専売制をしく。このとき木綿下座の者として、猪八郎(榎ヶ原村),九平次(下村),塩田屋善次郎(天城)の名がみえる。
1798 寛政10	児島の上村,下村,田之口,引網,小川,山村で小倉帯,真田紐(由加土産)を作る。
1843 天保14	郡内の有力な小倉織元として下村の長之介,千代蔵,千蔵,治兵衛,稗田村の金蔵,按之介など十数人の名が知られる。
1848 嘉永元	児島郡村々に上村八人を筆頭に小倉商人五三人あり。 児島郡中総居村三千機,年間生産高7万四,五千両その内大阪登りが,二万四,五千両,遠国売五万両であった。
1859 安政6	藍(染料)の改方御用所が児島郡下村と北浦村に置かれる。
1880 明治13	渾大坊埃二,下村紡績所設立
1882 〃 15	下村紡績所操業開始
1888 〃 21	倉紡伝習生,下村紡績所に派遣される。 角南万次郎(鴻村)が韓人紐を創出した。
1889 〃 22	下村と上村合併し鴻村誕生。
1894 〃 27	琴浦村に与田銀工場(製紐,織物)開業。
1896 〃 29	味野に児島銀行,下村に鴻村銀行設立。 児島織物合資会社設立。 児島郡中に一〇三軒の足袋縫製業者あり,その生産量四〇万足。
1899 〃 32	岡山,下村間に馬車の往来開始。
1900 〃 33	足袋会社松香合名会社上村池尻に設立。
1902 〃 35	鴻村に郵便受取所開設。
1903 〃 36	鴻村銀行破産閉鎖。 下村紡績株式会社任意解散。
1906 〃 39	旧下村紡績株式会社は愛媛紡績株式会社下村支店となる。この頃,与田銀次郎,尾崎峯三郎,柏野卯八郎相前後して腿帯子の輸出を始める。児島の弁髪紐が大陸に進出。 松三曙(児島上村),全国にさきがけ足袋縫製に動力ミシン使用。
1907 〃 40	鴻村と田ノ口村合併して琴浦村となる。 小川の藤原友太郎が袴地と生産に初めてスチームエンジン使用。
1908 〃 41	琴浦村に備前織物生産組合設立。 児島の韓人紐の製造減少し,中国向けの腿帯子生産盛況。
1910 〃 43	下村局電信取扱い開始。 備前帯子株式会社,琴浦村引網に設立。
1913 大正2	児島電気株式会社開業,琴浦村の市街地に電灯電力供給。 児島郡の足袋生産量五五一万足,生産価額約五五万七千円,岡山県足袋同業組合児島支部,琴浦上村に設置。
1914 〃 3	琴浦村東明石の明石時三郎が厚司地用の霜降りを織出した。
1915 〃 4	琴浦村に町制施行。
1916 〃 5	岡山県輸出織物同業組合設立。事務所を琴浦町におく。 岡山県の足袋生産一千万足に達し全国一となる。
1917 〃 6	郡内織物の種類は着尺,袴地,前掛地,小倉帯,真田紐,雲斎,足巻雲斎,厚仕,洋服地,腿帯子,弁髪紐など三十余种。
1918 〃 7	角南周吉学生服の縫製はじめる。 愛媛紡下村支店は近江帆布下村工場とる。

1921	大正10	児島織物株式会社（児島社）が学生服の生産開始。 松井武平，光輝畳緑の製造導入。
1923	〃 12	下村の西山改一，学生服製造はじめる。
1930	昭和 5	日本被服株式会社が設立され，学生服縫製に流れ作業採用。
1934	〃 9	竹村棉業，近江帆布下村工場を買収，琴浦紡績株式会社と改称。
1936	〃 11	児島商業学校（琴浦高校の前身）開校。
1937	〃 12	児島東野崎浜で真空式製塩法開始。
1941	〃 16	児島元野崎浜でカナワ式製塩を廃止。 日本衣料統制㈱の第二代行組合が児島下の町におかれ，児島地方十五の大手メーカーで構成。
1946	〃 21	琴浦商工会議所設立。
1947	〃 22	琴浦商工会議所と南児商工会議所合併，児島商工会議所設立。
1948年	〃 23	児島町市制施行。 市立児島高等学校開設（定時制）
1952	〃 27	児島地区紡績工場の現況 敷紡味野工場（紡機 19,200錘，織機 728台，従業員 757人） 琴浦紡績（〃 8,344〃 〃 0台，〃 220人） 備前棉業（〃 8,400〃 〃 0台，〃 135人） 児島の明石被服興業，尾崎商事他五社，東レナイロンの系列に入る。武鑑織布工場がクラレと 連携，合織革命時代開始。 児島競艇場を琴海浜に開設
1956	〃 31	琴浦町と児島市合併。
1958	〃 35	テトロンを素材とする児島の学生服はこの年から昭和36年秋まで生産，販売とも上昇の一途 を辿る。
1960	〃 35	竹村棉業，琴浦紡績を備前棉業に売却。
1963	〃 38	児島地区では学生服1,006万着を生産，史上最高を記録。
1965	〃 40	児島市下水終末処理場起工。
1966	〃 41	倉敷，児島，玉島市議会が三市合併議決。
1967	〃 42	三市合併，新市発足（人口307,603人93,405世帯）
1968	〃 43	学生服生産過剰，需要縮小による倒産あいつぐ。
1970	〃 45	児島文化センター開館 児島ゴミ焼却場稼働。 児島下水処理場通水式。
1972	〃 47	下津井電鉄，茶屋町，児島間廃止。
1973	〃 48	児島図書館，公民館新築。 児島の縫製業の大手，尾崎商事㈱，創業120年，従業員2,000人，学生服，体育衣料，シャ ツ，布帛製品，カジュアル製品を生産，年商70億円。
1974	〃 49	後進国からトレパン，布帛類大量安価輸入，国内市場混乱。
1978	〃 53	本四架橋（瀬戸大橋）起工式。
1980	〃 55	第13回国勢調査，倉敷市人口403,785人，うち児島地区人口80,779人（琴浦地区26,224人）。

出典 『倉敷市歴史年表』（倉敷市歴史年表編集委員会，昭和53年），『児島機業と児島商人』巻末の児島機業縫製史略年表（角田直一，昭和55年）

表2 児島地区人口の推移

年	児島地区計		児島	赤崎	味野	本荘	下津井	琴浦	郷内
	人	%	%	%	%	%	%	%	%
1920 (大9)	38,196	(100.0)	11.7	6.0	13.6	6.3	21.7	28.2	12.5
1935 (昭10)	47,696	(100.0)	14.0	6.4	14.6	5.0	15.6	33.5	10.9
1947 (昭22)	57,373	(100.0)	12.9	20.5		5.4	17.3	33.2	10.7
1955 (昭30)	68,688	(100.0)	14.1	7.0	14.3	4.7	15.1	36.4	8.4
1965 (昭40)	77,420	(100.0)	15.1	7.9	12.7	4.3	13.3	38.8	7.9
1980 (昭55)	80,779	(100.0)	21.2	9.9	9.4	5.2	10.6	32.5	11.2

国勢調査

「備前・備中にわたる沃野の干拓は、300年にわたる人為の結晶である。児島人の豊かな労働力は、これらの新田で栽培された綿を加工して糸を作り、布を織り、紐を編み、帯地や足袋、着尺、袴地をつくりだす技術を開発した。いわゆる児島機業地は由加山を中心とする四周の村々で興り、幕末に於ては既に高機3000台を保有していた。

明治に入ってから韓人紐、腿帯子などの輸出織物に精励し、加えて年間1000万足を製造した足袋縫製業は、明治、大正の児島半島に生気をみなぎらしめた。足袋は遠い昔から玄海灘や赤江灘を越えて九州南部に届けられ、津軽海峡を渡って北海道にも達していた。

服装の変遷に応じて、足袋に代わって登場した学生服は、戦前戦後を通して児島のアパレル産業の花となり、全国市場を席卷して学生服王国の名をほしいままにする」(20頁)。

「売って出て足でかせぐ持回り商法が、児島機業の繁栄の土台であった。流行を外でつかみ先進地から学びながら、それを越えていく直観力の鋭さがあった。児島の織物縫製業は綿の厚織りを中心とした大衆衣料に徹し、文字通り日本の庶民と肌をすり寄せて生きてきた」(22頁)。

我々の調査対象地域、下の町が、児島のなかでも典型的な機業地であることは、たとえば、児島の縫製、織物、染色業者の5割強のものが、下の町の位置する琴浦地区に集中していることからあきらかに指摘しえよう。機業を中心とする事業体の配置を背景に、琴浦地区は児島のなかで常にトップを占める人口をかかえてきたこともわかる(表2)。

〇自治会の所属する倉敷市自治会児島連合会の組織図および学区、地区、班の構成、世帯数については、図2および表3～5に示すとおりである。〇自治会は、昭和58年4月現在、344世帯、1333人。これが18班に分かれており、調査対象として選定した第1班は24世帯104人から構成されている。このうち、インテンシブな面接調査が可能であったのは20世帯であり、以下の分析はこの20世帯を中心に行う。

2 地域社会への根づきの過程

まずはじめに、親の仕事と世帯主本人の職歴、現職等の分析をとおして、人々のこの地域社会への定着の歴史を跡づけると、四点ほどの特徴を指摘しうる(図3)。

第1に、圧倒的に、この地域に生まれ育った地つきの層が多い。夫が他界した1事例(⑧)

図一 倉敷市自治会児島連合会組織図

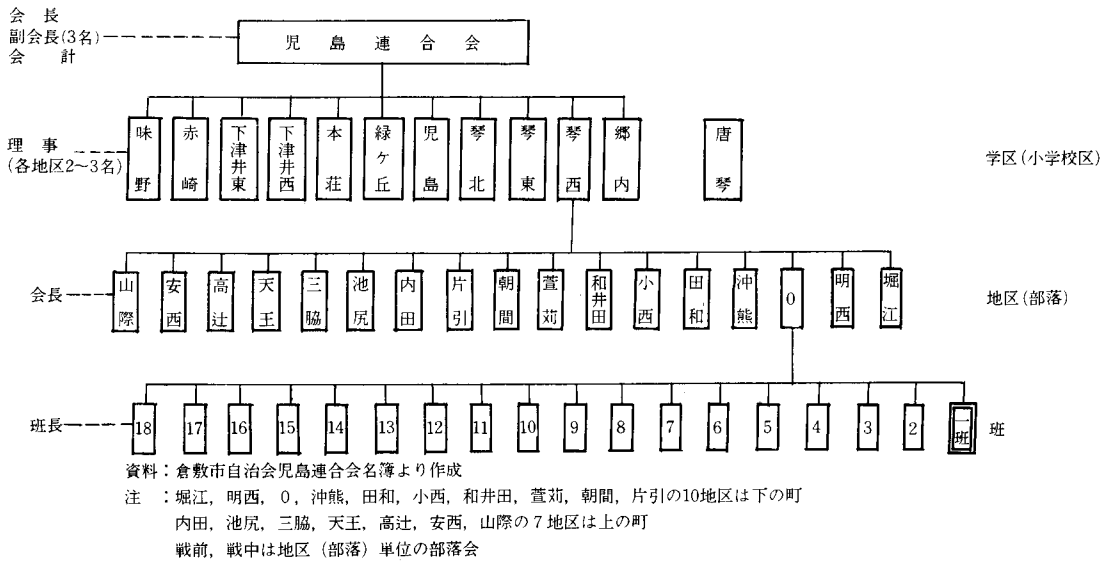


表3 児島連合会学区内地区及び世帯数

学区名	地区数(部落)	世帯数
味野	7	2,211
赤崎	18	2,929
下津井東	13	2,665
下津井西	16	803
本莊	6	1,151
緑ヶ丘	17	2,348
児島	24	2,477
琴北	3	163
琴東	11	2,025
琴西	17	4,210
郷内	35	2,722
計	167	23,704
唐琴 (連合会未加入)	6	1,861
合計	173	25,565

資料：『倉敷市自治会児島連合会名簿』昭和57

注：……内は調査対象の位置

表4 琴西地区内班及び世帯数

地区名	班	世帯数
堀江	32	364
明西	7	79
0	18	363
沖熊	32	386
田和	23	430
小西	10	270
和井田	17	311
萱苺	14	329
朝間	11	229
片引	9	227
内田	8	133
池尻	14	166
三脇	12	188
天王	7	122
高辻	5	86
安西	11	153
山際	9	174
堀江市住1		40
〃 2		30
〃 3		20
〃 4		40
〃 5		40
〃 6		30
計	(245)	4,210

資料：『倉敷市自治会児島連合会名簿』昭和57

表5 0自治会班構成

班名	世帯数
第1班	24
第2班	10
第3班	20
第4班	14
第5班	22
第6班	24
第7班	20
第8班	16
第9班	23
第10班	18
第11班	22
第12班	12
第13班	11
第14班	13
第15班	17
第16班	23
第17班	31
第18班	24
計	344*

*男性 626名

女性 707名

資料：琴西地区理事面接調査資料昭和58

を除く19事例中、実に13事例の世帯主が児島下の町で生まれている。うち現住地で生まれたものが5事例(③④⑤⑱⑳)、のこり8事例(②⑥⑦⑨⑩⑪⑰⑱)も下の町町内の出身である。さらに1名(⑩)は隣町の児島味野出身であり、1名(⑫)は岡山市出身、同じく近接する久米南町出身の1名(⑭)は養子で、養子に入った家は100年以上まえから現住地にあるという。こうして16事例84%が岡山県下で生をうけていることがわかる。のこり3事例のうち2事例は四国香川県の出身(①⑮)で、1事例⑬は島根県の出身である。香川県出身の①は玉野市で三井金属日比精錬所勤務の時代に親族ネットを頼ってこの地に移転しており、⑮は、縫製工場に就職した縁でこの地に根づいたという経歴の持主である。

第2に、親の仕事にみる特徴として、この地域のかつての地域産業、塩田の小作のかたわら農業に従事(③④⑨⑫⑱)、さらには機業に従事(⑥⑦⑪⑳)のしめる割合の高さがかびあがる。加えて⑭の養父は11~12歳のときから現住地で機業に従事してきたし、⑤の父も沖仲仕をへて機業に従事しており、計11事例の親は児島三白のうちの二白(塩業と機業)に従事していたことがわかる。

第3に、世帯主本人の職歴との関連においてみると、織物、縫製、染色を中心とする繊維産業とのかかわりがいちじるしく高く、20事例中11事例が繊維産業に従事している(③④⑤⑦⑨⑩⑫⑭⑮⑰⑱)。父の仕事と比較するとき、塩田衰退後、塩田と並ぶ地域産業の繊維産業に集中していった経過が明らかとなる。この11事例に、親の代のみの繊維産業(機業)従事(⑥⑪⑬)を含めると、14事例、7割もの世帯において繊維産業とのかかわりがみられる。

しかしながら、第4に、日本の産業構造に占める繊維産業の位置づけの転換を反映するかのようには、世帯主の現職が繊維産業と関連する世帯は8世帯へと減少する。いま、世帯主の従業上の地位と就業する産業を尺度に調査対象世帯の階層分けを試みるならば、先の図3の右端に示したように、中小企業経営者層2事例(いずれも繊維関連、⑦⑱)、自営業者層3事例(うち1事例⑩繊維関連、のこり2事例⑥⑫は非繊維)、非繊維産業雇用者層7事例(①②⑧⑨⑪⑬⑱)、繊維産業雇用者層5事例(③④⑤⑭⑮)そして、不安定就労、年金生活者層3事例(⑧⑬⑰)の5階層を別出しうる。そこには、小論の冒頭でのべたように、地域ぐるみの繊維産業との関連を色濃くもちながらも、次第に非繊維産業従事の割合を高めつつある地域の就業構造の特徴がかびあがる。

同じように、世帯主の妻の生活史を追うと(図4)、第1に、通婚圏がいちじるしく狭く、児島出身者の割合が高く、妻と離別した⑬を除く19事例中児島出身者が12事例、6割強をしめる(①②③⑨⑩⑪⑭⑮⑰⑱⑲⑳)。のこり7事例中3事例は岡山県下(④⑥⑮)、2事例が愛媛県(⑦⑫)、1事例が長崎県(⑧)であり(不明が1事例⑤)、九州、四国とのつながりが指摘できる。

第2に、四国等からの移動も含めて、結婚前に縫製等の繊維産業に従事した経験をもつものが11事例(①②③⑥⑦⑪⑫⑭⑮⑰⑱)と過半数をしめることがわかる。うち9事例は児島の被服工場、製紐工場等に勤務している。

第3に、結婚後においても、自営、雇用(常雇、パート)、内職等、さまざまなかたち

図3 親の仕事×職歴×現職×階層(夫)

親の職業	ケース番号	生年	生まれた所	学歴	職歴					現在の年齢	現職	階層		
					M~	S 20	S 30	S 40	S 50					
1. 縫製経営者層 (T.N.被服) (T.K被服)	⑦	T 7	児島・下の町	高小卒	家業T.N.繊維(S 7~34児島)			分家して独立, T.N被服(S 34~現在, 児島)		才66	T.N.被服経営者	経営者層 (2事例とも繊維産業)		
	②⑨	S 31	児島・下の町	高卒	K製鉄(S 50~現在, 水島)					27	K製鉄勤務			
2. 商工自営業者層 (縫製) (大工)	⑥	S 23	児島・下の町	高卒	理容店(S 42~44, 広島), 理容店自営(45~現在, 児島)					36	理容店自営	自営業者層 (3事例中1事例繊維産業)		
	②	S 6	児島・下の町	小卒	M重工養成工(S 18~S 20)	K電気工事(S 20~57)	T電業社(S 57~現在)			53	T電業社勤務			
3. 農業自営業者層 (農) (農) (農) (農)	①	S 3	香川県	高小卒	呉航空廠養成工, 大工見習大工, M精錬臨時, M精錬本雇, M日比濾過(S 17~18), (S 18~21, 岡崎), (S 21~29, 玉野), (S 30~32, 玉野), (S 32~58, 定年, 玉野), (M精錬の下請, S 58~, 玉野)					56	M日比濾過勤務	夫, 非繊維産業雇用者層 (7事例中3事例繊維産業)		
	⑩	S 8	児島・下の町	中卒	A被服(S 23~26, 児島)	S縫製(S 27~32, 児島)	縫製下請自営(S 33~現在, 児島)			51	縫製業自営			
	⑫	M28	岡山市	尋小卒	家事農業手伝, 縫製自営, 販売(M 41~?), (S 1~17, 児島)					89	酒屋自営			
	⑬	S 10	島根県	中卒	家業農業・炭焼(S 25~36, 島根), X工務店左官(S 36~49, 神戸), 左官屋自営(妻の兄と), N工業士方(S 49~57, 児島), (S 57~, 児島)					48	N工業勤務			
4. 塩田(雇用)・農業・織物兼業者	⑮	S 9	香川県	中卒	B縫製(S 25~現在, 児島下津井)					49	B縫製勤務	夫, 繊維産業雇用者層 (5事例中4事例繊維産業)		
	⑰	T 11	児島・下の町	高小卒	F物産(S 11~16, 倉敷) 兵役, トラック運転手(S 21~23)					61	N被服経営者			
	③	S 6	児島・下の町	高小卒	X被服(S 21~24, 児島)					53	N被服勤務			
	④	T 15	児島・下の町	高小卒	A被服(S 16~18, 児島), (S 18~20, 水島), (S 21~23, 児島), (S 23~26, 児島), (⑨は兄, S 27~36, 児島), (S 37~45, 児島), (S 46~現在, 児島)	M航空機下請	M被服	U縫製	N被服	縫製下請自営N被服へ戻る			58	N被服勤務
	⑨	S 6	児島・下の町	高小卒	M造船(動員)(S 19~20, 玉野)	製塩業(?)	染工場(?)	染工場(?)	運送業(?)	S電鉄(S 35~現在, 児島)	52		S電鉄勤務	
	⑱	S 8	児島・下の町	中卒	X電気工事(S 23~28, 児島)	Y造船電気下請(S 29~37, 玉野)	Z電気工事下請(S 38~47, 水島)	T電工(S 48~現在, 玉野)					50	T電工社勤務
5. 雇用者層 (日比精錬) (沖仲仕) (父死・母織物)	⑯	S 18	児島・味野	短大卒	井原中(S 38~44), 児島中(S 45~48), 味野中(S 49~55), K中(S 55~)					40	K中学勤務(教員)	不安定就労・年金生活者層 (3事例中1事例繊維産業)		
	⑬	S 14	岡山久米南町(入婿)	中卒	大工弟子, ガソリンスタンド, M運送S 39, 家業(縫製自営, 家従), K縫製(S 29~?), (?), (?), (人権), (S 47~55, 児島), (S 56~久米南町)					45	K縫製勤務			
	⑤	S 10	児島・下の町	高卒	S繊維(S 29~現在)					49	S繊維勤務			
6. 不明	⑰	T 13	児島・下の町	不明	Nプレス(S 32~現在, 児島)					43	Nプレス勤務			
					S化学・染料(S 22~55, 定年)					60	定年退職, 庭師手伝い(S 56~現在)			

資料: 実態調査より作成

注: ⑧は昭和44年夫死亡, 夫の生家は, 児島O被服, 階層は不安定就労・年金生活者層

図4 親の仕事×職歴×現職×階層(妻)

親の職業	ケース番号	生年	生まれた所	学歴	職歴					現在の年齢	現職	階層	
					M~	S20	S30	S40	S50				
1. 商工自営業者層	(織物)	⑬	S 3	児島	高小→青年学校		町役場(S 21~23, 児島)	家従N被服(S 25~現在, 児島)			才55	N被服(経営者の妻)	経営者層 (2事例とも繊維産業)
	(いぐさ)	④	S 5	茶屋町	高卒		幼稚園代用教員 学校給食 N被服(夫の兄の工場) D生命外交 P化粧品外交 (S 21~23, 茶屋町) (?茶屋町) (S 28~39, 児島) (S 39~現在, 児島) (S 43~現在)			54	D生命 P化粧品 外交		
	(米穀商)	⑩	S 9	児島・味野	中卒		家事従事(S 25~34, 児島)	家従縫製(S 37~現在, 児島)			50	縫製自営(家従)	
		⑮	S 21	児島	短大卒			Y音楽教室(S 42~43, 京都) ピアノの個人レッスン(S 44~現在, 岡山)			38	ピアノ個人教師	
	(和裁・母)	⑦	S 2	愛媛	尋小		I被服 N被服(S 16~18, 児島)(S 19~23, 児島)	家従T.N被服(S 24~現在, 児島)			57	TN被服(経営者の妻)	自営業者層 (3事例中1事例繊維産業)
(絹織物・母)	⑧	M38	長崎県	大卒		文化学園教師, 川村学園教師, 日本語学校教師(S 1~6, 東京)(S 6~10, 東京)(S 11~18, 東京)	英語塾(S 47~現在, 児島)			79	英語塾(年金・仕送)		
2. 農漁業自営業者層	(漁師)	①	S 5	児島・下津井	不明		T製 紐(S 24~32, 唐努)	競艇場従業員(S 33~現在, 児島)			54	競艇場勤務	夫, 非繊維産業雇用者層 (7事例中3事例繊維産業)
		③	S 11	児島・塩生	中卒		縫製内職(S 25~30, 児島)	N被服縫製内職(夫の兄の工場, S 30~現在, 児島)			48	縫製内職	
		⑥	S 29	岡山・みかも町	中卒			N被服 理容学校入学生, 理容家従(S 44~46, 児島)(S 47~49) (S 47~現在)			30	理容自営(家従)	
3. 塩田(雇用)・農業・繊維兼業層		②	S 4	児島・田の口	高小卒		K被服, I産業(繊維) N被服(S 19~21, 児島)(S 21~22, 児島) (S 24~48, 児島)	本屋荷造り(S 48~52, 児島) M被服(S 54~現在)			55	M被服勤務	夫, 繊維産業雇用者層 (5事例中4事例繊維産業)
		⑨	S 3	児島・田の口	高卒		K航空産業 製麺会社(S 19~20, 児島) (S 22~24, 児島) T染 工(S 25~43, 児島) T被服, N紙器 市の委託集金(S 45~47, 児島) (S 48~現在, 児島)			56	市の委託集金勤務		
		⑪	S 16	児島・味野	中卒		O縫製(S 31~35, 児島)(S 35~38, 児島) H被服 K被服内職(S 38~現在)			43	縫製内職		
4. 雇用者層	(日比精練)	⑭	S 11	児島・O	中卒		父の家業(縫製)手伝い(S 26~55, 児島)	K被服パート(S 56~現在)			48	縫製パート勤務	不安定就労・年金生活者層 (3事例中1事例繊維産業)
	(日比精練)	⑮	S 11	玉野	中卒		T興業マシン(S 25~26, 玉野) ? (S 25~30)	縫製内職(S 49~現在)			48	縫製内職	
	(製麺所)	⑯	S 12	児島・榊田	中卒		U縫製(S 25~28, 児島)(S 28~31) 縫製内職 結婚以降縫製の勤めと内職交互, 現在縫製内職			47	縫製内職		
	(土木)	⑳	S 34	児島・通生	高卒			S化学(S 53~現在)			25	S化学勤務	
5. 不明		⑤	S 10	不明	不明		不	明			49	縫製内職	不安定就労・年金生活者層 (3事例中1事例繊維産業)
		⑰	M31	愛媛	尋小		酒屋店員, 縫物内職	酒屋(自営)			86	酒屋自営(家従)	
		⑱	T 15	児島・田の口	高小		女中華公 N被服 服屋つとめ(S 8~17, 大阪)(S 17~20, 児島) (S 20~21?)	O被服(S 49~現在)			58	O被服勤務	

資料：実態調査より作成

注：⑬の妻は離別，島根出身，縫製工場に勤務していた。階層は不安定就労・年金生活者層。▲は結婚，▲▲は再婚×は夫死亡を表す。

で繊維産業に従事してきた事例が13事例をもしめ、うち11事例は、現在においても繊維産業に従事である（中小企業経営者の家族従業者⑦⑱，自営業主の家族従業者⑩，常雇②⑱，パート⑭，内職③⑤⑪⑮⑲）。第2，第3の実態をふまえるとき，女子型といわれる児島の繊維産業の特徴がその生活史に刻印されているさまがくっきりとうかびあがる。

こうして表6にみるように，家族員現職にみる繊維産業との関連をみると世帯員のひとりないし複数のものが繊維産業に従事する世帯が12世帯（②③④⑤⑦⑩⑪⑭⑮⑱⑲），非関連世帯が8世帯（①⑥⑧⑨⑫⑬⑯⑳）という内訳となる。しかしながら，現時点において非関連の世帯も，表7の夫の生活史にみる繊維産業との関連，表8の妻の生活史にみる繊維産業との関連にみるように，世帯主夫妻の生活史との関わりでみるならば，繊維産業と深いつながりをもつ事例が多く，結局，表6の注に書き入れたように，世帯主夫妻とその両親の生活史および現職をとおして繊維産業と非関連の世帯は20事例中唯1事例しかない（⑯）という事実があきらかとなる。

表6 家族員現職にみる繊維産業との関連

	妻子 繊維家従	妻子 繊維雇用	妻子 繊維内職	妻子とも無関係	妻離婚	総数
夫 繊維経営者	⑦ ⑱					2
夫 繊維自営業者	⑩					1
夫 繊維雇用者		⑭	③ ⑤ ⑮	④		5
夫 非繊維自営業者				⑥ ⑫		2
夫 非繊維雇用者		②	⑪ ⑬	① ⑨ ⑯ ⑳	⑬	8
夫 定年退職		⑰				1
夫 死亡				⑧		1
総 数	3	2	5	8	1	20

資料：実態調査より作成

注：⑯は生活史及び現職をとおして繊維産業と非関連の唯一の世帯

表7 夫の生活史にみる繊維産業との関連

	ケース数	ケース番号
親一代	3	⑥ ⑧ ⑳
親子二代	4	③ ④ ⑦ ⑱
子一代	7	⑤ ⑨ ⑩ ⑫ ⑭ ⑮ ⑲
親子とも無関係	6	① ② ⑪ ⑬ ⑯ ⑳
総 数	20	

資料：実態調査より作成

表8 妻の生活史にみる繊維産業との関連

	ケース数	ケース番号
親一代	1	⑧
親子二代	3	⑨ ⑪ ⑱
子一代	12	④ ⑩ ⑦ ① ③ ⑥ ② ⑭ ⑮ ⑬ ⑤ ⑰
親子とも無関係	3	⑯ ⑳ ⑫
総 数	19	

資料：実態調査より作成

表9 階層×居住年数（世帯主）

階層 \ 居住年数	戦前からの居住	戦後～1965年までの居住	1965年以降の居住	計
A. 経営者層	⑬	⑦		2
B. 自営業者層	⑥ ⑫	⑩		3
C. 夫 非繊維産業雇用者層		② ⑨ ⑪ ⑳	① ⑯ ⑱	7
D. 夫 繊維産業雇用者層	③ ④ ⑤ ⑭	⑮		5
E. 不安定就労年金生活者層		⑧ ⑬	⑰	3
計	7	9	4	20

資料：実態調査より作成

さらに、現時点において繊維と関連をもつ世帯は、どちらかといえば現住地に古くから居住する世帯であり、現時点における非繊維産業雇用者層の世帯は、児島内他地域に出生して分家後に現住地に転居、または他地域から転居してきた層が多いという傾向も把握しうる（表9）。

先に、児島の歴史についてふれたが、いま、調査対象地域の下の町を含む児島への人々の根づきの過程のなかでも特徴的な層を大きくくくると、四つの層がうかびあがる。ひとつは、幕藩体制下の時代からこの地に根づき、棉作、漁業、塩業、足袋、腰紐製造等への従事を生業とした層およびその子孫である。第2は、明治から大正にかけて、製紐、織物、紡績、足袋、畳縁等の工場で働くために、中・四国等から児島に渡った層である。これらの出稼ぎ者のなかから結婚等によりこの地域に根づいた層およびその子孫が児島に住む。第3は、大正末年以降の新興縫製業、男子学生服の縫製従事のため、中・四国、九州から出かせぎで入ってきた層である。特に香川県を中心とする四国からの求職が多く、一時は現住所は児島、本籍は香川県という住民が児島の住民の半数をしめたという。これらの出稼ぎ者のなかから、第2の層と同様、結婚等により、児島に根づいた層とその子孫が児島に住む。第4は、戦後における新規学卒者の根づきである。戦後、学生服の生産量がピークに達するのは昭和37年で、その頃の求人の中心は中卒にあり、山口県をはじめとする中・四国、九州、近畿から中高卒あわせて1,500～2,000名の新規学卒者が毎年、児島に入った。⁽³⁾ 第2、第3の層と同じく、このうち、一定の層があらたな住民として、この地に根づく。第5は、その他の層である。

今回の調査では、世帯主夫妻の両親の生活史を詳細に追ってはいないため、調査対象者の「家」のこの地への根づきの過程をあきらかにすることはできない。しかし、世帯主夫妻の両親ともに、織物、いぐさ、塩田といった地域産業等に従事するものの割合が高いことからみて、第1、第2、第3の段階の根づき層およびその子孫の割合が高いことがわかる。出稼ぎ定着の場合は、香川県、愛媛県を中心とする四国からの移住が多いことが把握される。

以上、きわめてかいつまんだかたちで地域住民の生活史を追ってきたが、塩田と機業から縫製を中心とする繊維産業へ、さらにはその主なる担い手を女子、それもかつての未婚女子型から既婚女子型へと移行させながら継続しつつ、男子はあらたなる産業従事を模索という、地域産業変動の波のなかでの地域住民の生活防衛的対応が明確に把握されるといえよう。

II 就業構造にみる特徴

さて、以上に展開した生活史にみる特徴は、即ち、現時点における世帯単位の就業構造の特徴につながる。この点について第2に考察する。

表10は、調査対象世帯の1年間の総所得と先の、世帯主の従業上の地位と就業する産業を尺度に試みた階層のクロス表である。20事例中、1000万円以上層が4事例(⑥⑦⑩⑱)、いずれも中小企業経営者層および自営業者層である。このなかには、たとえば⑱にみるように、年収4000万円、貯蓄1億円という層も含まれる。一方の極に、年収300万円未満の不安定就労、年金生活者層が存在する(⑧⑫⑬⑰)。300万～500万円未満層に6事例(⑤⑭⑮⑰⑱⑳)、500万～700万円未満層に6事例(①②③④⑨⑪)が入る。300万円未満層の⑬が借家層であるが、のこり19世帯は持家層(⑳は借地)である。非繊維産業と繊維産業就業では、前者の方が高所得の傾向をみせる。

表10 階層×所得(家族総所得)

階層	総所得 300万円未満	300～ 500万円未満	500～ 700万円未満	700～1,000 万円未満	1,000万円 以上	計
A. 経営者層					⑦ ⑱	2
B. 自営業者層	⑫				⑥ ⑩	3
C. 夫 非繊維者 業雇用者層		⑬ ⑮*2 ⑳	② ① ⑨ ⑪			7
D. 夫 非繊維産 業雇用者層		⑤ ⑭ ⑮	③ ④			5
E. 不安定就労年 金生活者層	⑧*1 ⑬ ⑰					3
計	4	6	6	0	4	20

資料：実態調査より作成

注：※1は借家層、※2は持家借地層、残り18世帯は持家層

表11 世帯構成×世帯員数

世帯構成		員数											計		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		12	
夫婦家族的世帯	夫婦のみ		12(17)20												3
	夫婦＋子			19(9)10 11(13)18		16									7
直系家族的世帯	直系三世代			14	5		4(6)			3					5
	直系四世代								2(9)						2
傍系・非親族を含む世帯														7	1
単 独 世 帯		8(13)													2
計		2	3	7	1	1	2	—	2	1	—	—	1	20	

資料：実態調査より作成

表12 多就業構造(1)

	夫 単 独	夫 十 妻	夫＋妻＋子	夫＋妻＋子(複)	夫 十 子(複)	計
夫婦家族的世帯		9 11 12 16 17 20	1 10 15 18			10
直系家族的世帯 (含 傍系)		6 14	2 4 5	3 19	7	8
計	—	8	7	2	1	18

17世帯 (夫婦共働き世帯)

資料：実態調査より作成

注：単独世帯2ケースを除く18ケースを対象

表13 多就業構造(2)

稼働形態	世帯数
1人稼働世帯	—
2人稼働世帯	8
3人稼働世帯	7
4人稼働世帯	3
計	18

資料：実態調査より作成。

注：単独世帯2ケースを除く。

ところで、これらの所得を単独稼働のかたちで得ている世帯は、単身世帯2世帯以外は皆無である。20世帯中夫婦家族的世帯が10世帯、直系家族的世帯が7世帯、傍系・非親族を含む世帯が1世帯、そして単身世帯2世帯という内訳であり(表11)、はじめにふれた児島全体の世帯構成の特徴を上まわることかたちで直系家族的世帯の割合が高いが、この世帯構成の相違にかかわらず、複数の世帯員による稼働が一般化している。表12にみるように、夫と妻(6⑨⑪⑫⑭⑯⑰⑳)、夫と妻と子(①②④⑤⑩⑮⑱)、夫と妻と複数の子等(③⑦⑲)、いわゆる多就業形態をとる世帯が18事例、全事例をしめる。したがって、稼働員数も2～3人にモードがあり(2人稼働世帯8事例、3人稼働世帯7事例、4人稼働世帯3事例、表13)、まさに、世帯員総働きで生活を防衛する形態が指摘できる。このうち、

特に、夫婦共働きの形態をとる理由が経済的理由にあることは、働く理由を問う質問に対し、夫の給料だけでは暮せないから(14)(15)(16)、夫の給料で暮せるけどゆとりがないから(2)(18)(20)、子どもの教育費のため(2)(9)、老後や病気などの備えのため(6)(18)、土地、建築資金の貯えやローンの返済のため(6)(11)(16)(20)と答えるものの割合が高いことから把握される。しかし、家にいるのはもったいないから(1)(18)(20)、家にこもってたくないから(9)、働くことが楽しいから(4)、仕事が面白いから(4)といった経済外的理由をのべるものも少数だが存在する。経営者層と自営業者層の妻(10)(19)は家業だからと答えている。そして、これら共働きの妻たちの大多数はこれから先も仕事を続けていこうと考えており、できれば転職したいとか、早くやめて家庭に入りたいと思っているものはひとりもない。なるべく長く続けたいと答えるものが9事例(2)(4)(9)(10)(11)(14)(15)(16)(18)、あと何年か続けたいと答えるものが4事例(6)(7)(19)(20)と、職業継続意志はつよい。

ところで、ここで、先の階層区分の最上位をしめた中小企業経営者層2事例の妻の言葉の一端を紹介しよう。

事例⑦

「昭和34年、42歳のときに分家して独立しました。本家が男物を扱っていたので、婦人服を手がけました。当初はN被服の下請でセーラー服やスカートの縫製をやり、昭和48年からはRのスラックスやパンタロン、昭和53年からはMの下請でトレーニングウェア等が中心です。

分家した頃は従業員集めに苦労しました。愛媛や徳島そして和歌山などから集めました。一番多いときで寮に26名の若い子がいました。わが子のように育てて、日曜日に御馳走し、家を思い出すことのないように心がけました。嫁に出す時には、三面鏡や夫婦の寝具、食器類などもたせました。絵羽織や式服等も用意しました。ほかに、給料から積みたてておいたお金を結婚後1年後に渡すこともしました。

従業員は時間を守って働かせましたが、自分はみんなが寝たあとで2～3時間は働いたものです。夫が帳面をつけるそばで自分は裁断や縫製をしました。人間の生活じゃない生活をおくってきました。そうでなければ会社を三つも作れなかったと思います。いま3工場(本社工場、近郊のK工場、香川県のK工場)に常雇と外注あわせて100名の従業員が働いています。寮生はいなくなり、通勤の主婦が中心です。中卒者がいなくなり、新卒の高卒者は縫製にむかなくて、主婦労働にたよっています。男子は日給+出来高ですが、女子は時間給です。最低賃金の日給3400円を8時間で割って時給をきめています。雇用保険や厚生年金、健康保険は完備しています。

現在、夫が社長、長男が取締役。私も姉婿、長男の妻、姉、次男ともに働いています。」

事例⑨

「昭和24年に結婚、半年後に現在のN被服を設立しました。2人の弟夫婦もいっしょに住み、ともに働いたので、一時期は大家族でしたが、次々と新家をたてて独立しました。仕事はいまもいっしょにやっています。夫が社長、長女の婿が専務、妻も長女も役員です。弟たちは従業員として働いています。製品の中心は学生服で、他に体育着や作業ズボンの縫製も手がけています。従業員76人、男子11人、女子66人、うちパートのひとが10～15人います。

30年まえには、連日、朝8時から夜10まで働きました。日曜日ありませんでした。ストーブをたいても寒気があがる冬の日、夫とふたりでミシンにむかっていた頃を思い出します。やればなんでも

できるんだという言葉は合言葉にして、いつもいっしょに働いてきました。子どもは保育園にいれました。昭和25年までは足踏みミシン、昭和25～26年にかけて発動機ミシンが入り、昭和27年には電気ミシンにかわりました。7年前からはマイコンミシンです。昭和30年代のおわり頃、寮に入る女子が次第にいなくなった頃、この商売も危いと思って食物商売を考え、副業にレストランを開いたこともあります。いまでは働く人はみな主婦です。

年商10億になった現在も、毎日、工場に出ています。新規にいれた子にミシンを教える役です。経理の監督もしています。いまは9時から働いて、6時にはあがるので楽です。』

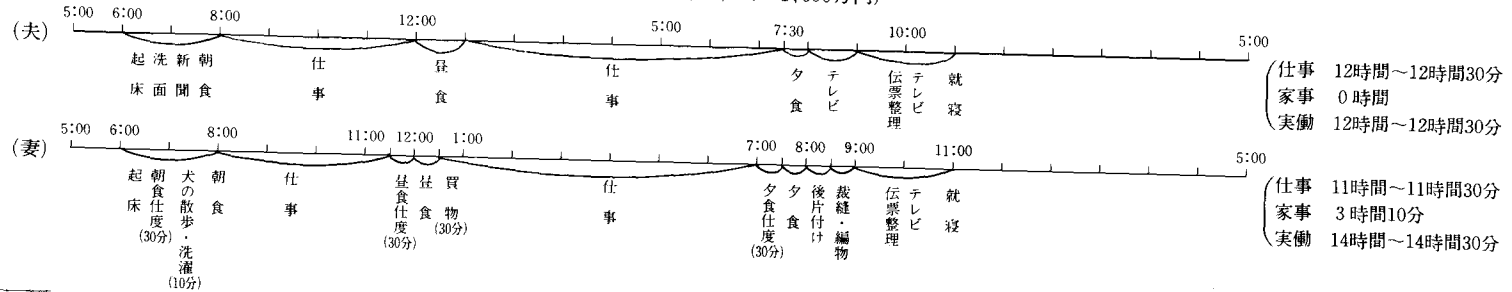
このようにみえてくると、年収4000万円近い中小企業経営者も、2～30年まえの時点から今日迄、まさに夫婦共働きをテコに、人並みでない苦労を重ねて這いあがってきた層であることがわかる。

このことは、のちに述べるように、これら這いあがりの且那衆を中心とする地域名望家支配の構造が、第2、第3の階層の上昇、逆に転落を含む、⁽⁴⁾きわめて柔構造的な特徴を示すものであることを教える。図5にみる事例⑩の生活時間は、第2、第3の経営者層をめざし、身を粉にして働く自営業者層の一日を示すものといえよう。雇人1名をおき、年間の加工賃1500万円～1600万円をあげる⑩の夫の実労働時間は12時間～12時間半、朝の8時から夜の7時半まで働きづめに働き、夕食後も伝票整理にあたっている。妻は夫と殆んど同じ時間帯で働き、加えて家事を一手にひきうけ、家事も含めた実働時間は14時間～14時間30分、これに7時間の睡眠時間を加えると、一日の2時間余しか自由時間がない生活をおくっていることがわかる。そして又、この図は、たとえば事例⑩の夫の生活時間に見るように、先に繊維産業労働者の上位に位置づいた非繊維産業労働者の所得が超長時間労働（事例⑩の夫の労働時間、12時間50分）によって獲得されたものであることをも教える。⑩の妻はポケット部分縫いの内職をしているが、ほぼ6時間働いて、1ヶ月に6万円程度の工賃である。

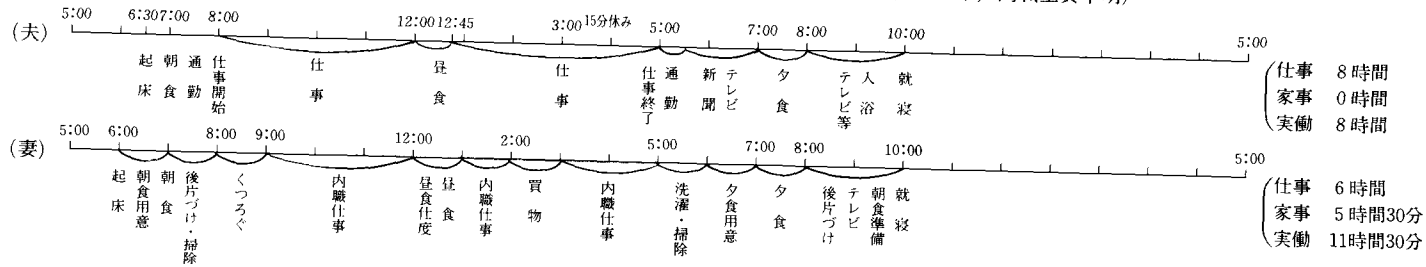
こうして多就業と長時間労働に代表される児島の地域住民の就業構造の一端が明らかとなる。

図5 生活時間の事例

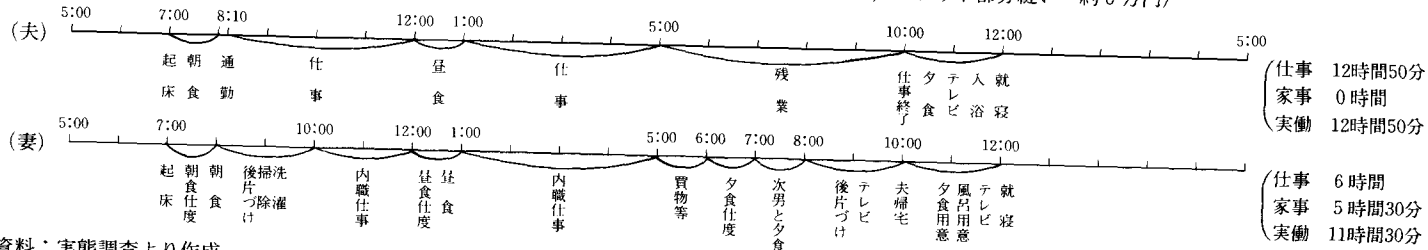
事例⑩ 自営業者層 (縫製業, 夫50才, 妻49才, 雇人1名 年間加工賃計 1,500~1,600万円)



事例⑪ 夫, 繊維産業労働者, 妻, 縫製内職 (夫49才, B被服(スラックス)生産部 手どり25万円, 妻47才, 内職工賃不明)



事例⑫ 夫, 非繊維産業労働者, 妻, 縫製内職 (夫42才, N プレス係長, 手どり20万円, 妻42才, ポケット部分縫い 約6万円)



資料: 実態調査より作成

Ⅲ 地域社会構造の特徴と血縁・地縁ネットワーク

ところで、第3に指摘しなければならないことは、すでにこれまでの展開においてもあきらかなように、地域住民の就業構造にみる家を本拠とする家業的経営の比率の高さ、さらには地づき層の厚さと親族ネットの層の厚さに代表される血縁や地縁の関係の重なるの状況についてである。

歴史的にみても、「児島には家業があって事業がないといわれる。血縁中心の家業的経営が産業資本家的経営への昇華を拒否したのである」（『児島風土記』22頁、昭和57年）という特徴をもつ地域であった。下の町は、その典型ともいえる特徴をもって地域の盛衰を刻んできたが、いまなお、家業的経営が顕著にみられる地域である。

先にみたように、近い過去を含めると、20事例中17事例において繊維産業への就業がみられるのであるが、うち14事例は、親族ネット中心の株式会社経営の経営者ないし血縁者（③④⑦⑯⑳）⁽⁵⁾、自営業者（⑥⑩）、内職（いわゆる工縫層）（②③⑤⑪⑭⑮⑱）等の家を本拠とする縫製業従事である。

さらに、世帯主の出生地と居住年数をクロスすると、表14にあきらかなように、この地域とのかかわりで三つの層がうかびあがる。夫がこの地域に生まれ、戦前から現住地に居住している家を地づき層Ⅰとおくと、この中に6事例（③④⑤⑥⑭⑱）が入る。⑭は婿入りであり、義父が地づき層である。児島生まれだが、現住地居住が戦後のものを地づき層Ⅱとおくと、このなかに8事例が入り（②⑦⑧⑨⑩⑪⑰⑳）、のこり6事例は児島以外で生まれたという意味ではよそもの層である（①⑧⑫⑬⑮⑯）。⑧の死別した夫は児島生まれだが、妻は長崎出身のためよそもの層に入れた。しかし、注にみるように、よそもの層もまたなんらかの血縁のネットがあってこの土地に定着したいきさつがある。⑫の妻は⑦の妻の母であるし、玉野市から転居してきた①は下の町〇自治会内に妻の妹、妻の父の従姉妹が居住している。⑮は妻の叔父が下の町に住んでいるし、⑯は遠縁のものが下の町にいる伝手でこの地に土地を求めて移ってきた。「この班でよそもんは自分だけ」という⑬にしても、離婚した妻の兄が下の町〇自治会内に居住している。

就業構造にみる家の存在と、いわゆる土地っ子＝地づきの層の層の厚さ、よそものと自ら名のるものも含めて、全世帯がこの地域社会に親族ネットをもつ世帯であるという事実は、地域社会の社会関係そのものにも大きく影響する。親族（ここでは親兄弟姉妹のみを調査）の居住地は圧倒的に児島地区内に集中しており（表15）、そこにはあきらかに血縁と地縁のネットの重なりが把握される。それは特に地づき層Ⅰ、地づき層Ⅱにおいて顕著である。「昔から知っている家」「仕事や子どものことを知っている家」「何でも話せる家」といった指標で問うた近隣関係も地づき層においてより密である。「まさかのときに頼りにする人」という問いに対する答は圧倒的に血縁ネットに集中し、職域のネットをあげたものはわずか3事例にとどまる。そこには、「最後が一番たよりになるもの」「心づよく感じるもの」と考える血縁者とのつながりを身近に確かめあいながら日々の生活をおくる、かなり閉鎖的な共同体的・ムラの社会的構造がうかびあがる。そうした一定の閉鎖性が、たとえば地づき層Ⅰの③にみる「血縁者＝最後が一番頼りになるもの＝だが、うるさい」

とか、⑭の「血縁者＝最後に一番頼りになるもの＝だがつきあいが苦痛」といった社会関係を結果していると考える。それ故にこそ、逆に、血縁関係の少ないものからは、「この人、あそこの家の奥さんはどこから来たとか、関係が濃い。…縁故があるから、うっかりした話をするとなつめけ」(⑧)といった意見が出てくる地盤がある。

表14 夫・出生地×居住年数

居住年数		戦前からの居住	～1965年	1965年以降	計
生まれたところ					
児島	下の町 現在地	⑬ ③ ④ ⑤ ⑥	⑫ ⑩ II		8
	下の町 現在地以外	I	⑦ ⑩ ② ⑨ ⑧ ⑪	⑬ ⑭	8
児島	味野		III	⑮	1
児島	以外	⑭	⑫ ⑮ ⑬	①	3
計		7	9	4	20

資料：実態調査より作成

注：I. 地づき層(1)

II. 地づき層(2)

III. よそもの層

⑫の妻は⑦の妻の母、⑫は再婚相手

⑧の夫(他県)の主人は下の町の〇被服、昭和44年他界

①は、〇自治会内に妻の妹、妻の父の従姉妹居住

⑬は、「この班でよそもんは自分だけ」というが、妻の兄が〇自治会に居住

⑮は、妻の叔父が下の町居住

⑩は遠い親戚が下の町居住

血縁と地縁のネットワークの重なりのもとで、日常の生活における助けあい、つきあい等は血縁者間で行なわれる機会が高く、近隣関係そのものはかなり都市化されている。冠婚葬祭には近隣関係がいきるが、子どもの出生、入学といった祝いごとは親族間にとどまるケースが多い。結婚にあたっては、新しく来る嫁を部落の近くまで迎えにいくと、嫁の実家からもってきた菓子(嫁菓子)を子ども達に配る風習がある。そのあと、姑が嫁を連れて自治会の班内を挨拶にあるくが、そのときにも嫁菓子(婿菓子)を配るという。お祝いはよほど懇意な近隣から届くが親戚が中心であり、おかえしがなされる。また、町内の人が死んだときには、講組に入っているか否かで自治会の班の役割は異なる。入っていない時には班の人が中心になって葬式の手伝いをつとめる。講組はお太子講で、月1度持ちまわりでお太子様をおがむ講が、この地域に古くから住む家を中心に組織されている。〇自治会内には3組あり、各組10戸強である。この講組に入っている家の場合には講組の仲間が葬式をとりしきる。一方、子どもが生まれたときには、親戚と向う三軒両隣り程度の近隣からお祝いがなされ、おかえしをする風習がある。子どもが小学校へ入学するときのお祝いは親戚が中心だが、高校入学のときには両隣りあたりから祝いが届く。町内に新しく来たときには、〇自治会一班の場合、タオルとか石鹼を配りながら全戸まわるのが一般

表15 地縁・血縁関係

階 ケ ー ス 番 号	近 隣 関 係			加 入 団 体		親 族 の 居 住 地 (生存者)								頼りにする人	血縁のつながりの意味		
	昔から知って いる家	仕事や子供の ことを知って いる家	何でも話 せる家	夫	妻	0自治 会	下の 町	児島 地区	水島 地区	倉敷 地区	玉島 地区	岡山県内 (町) (市)	他 県 (四国) (その他)				
地 づ き 層 (1)	A ⑬	30軒	20軒	※1 4~5軒	業者団体、商工会			6						3	親戚の人、家族	最後に一番たよりになるもの、 心づよく感じるもの	
	B ⑥	10~15軒	1~2軒	なし	理容師団体			3							家族、別居の子供達	最後に一番たよりになるもの	
	D ③	ほとんど	8~9軒	1軒		ライオンズクラブ、子供会 セラロジー、お太師講 ふるさと愛好会、子供育 成会、子供会、婦人会、 大太師講	3		2			3		1	親戚の人、家族	最後に一番たよりになるもの、 だがうるさい	
	D ④	ほとんど	2軒	2軒		円応教、婦人会、子供 会	3		2			3		1	親戚の人		
	D ⑤	ほとんど		2軒	四国電場めぐりの 会			1	4					2			
	D ⑭	ほとんど						2				4	1	2	親戚の人、家族	最後に一番たよりになるもの、 つきあいが苦痛	
地 づ き 層 (2)	A ⑦		1軒	1軒	商工会、淡水魚組合			4		1	1	1			昔の学友、親戚の 人、家族		
	B ⑩	20~30軒	20~30軒	2軒	漁協準組合員(趣味)	2		6	1			1			同業者	心づよく感じるもの	
	C ②			3軒				1	6		1			3	職場の上司	他人と変わらないもの	
	C ⑨	4軒	なし	なし	労組				4			1		3	なし	心づよく感じるもの	
	C ⑪				囲碁クラブ、ソフ トボールの会	1			3				1		近隣の人、親戚の人、 家族、別居の父母	最後に一番たよりになるもの	
	C ⑳	2軒	1軒	1軒	QCサークル、労 働組合				3				1		近隣の人、昔の学友、 別居の父母	気楽につきあえるもの、心づ よく感じるもの	
	C ⑬	25軒	8軒	8軒				1	6			1	1	1	親戚の人、家族	最後に一番たよりになるもの、 気楽につきあえるもの	
E ⑰	ほとんど	20~30軒	2~3軒					3	7				2			最後に一番たよりになるもの	
よ そ も の 層	B ⑫	ほとんど	1~3軒	2~3軒		1									近隣の人、親戚の人	最後に一番たよりになるもの	
	C ①		2~3軒	1軒	友愛会(職場)、 PL教団、氏子			4				1	3	1	親戚の人、信仰の仲 間、家族		
	C ⑮		2軒	2軒	労組、児島キリス ト教会			1				1	3	2	親戚の人、家族、信仰 の仲間、政党の人(社)	最後に一番たよりになるもの、 心づよく感じるもの気楽なもの	
	D ⑮	2軒	14~15軒	2~3軒				3						3	親戚の人、家族、別 居の子供達	最後に一番たよりになるもの、 心づよく感じるもの	
	E ⑧	1軒		※2		愛育委員			1					2	親戚の人、別居の子 供達	最後に一番たよりになるもの、 心づよく感じるもの、気楽なもの	
	E ⑬			1軒		婦人会			1					2			

資料：実態調査より作成

注：A. 経営者層, B. 自営業者層, C. 夫非繊維産業雇用者層, D. 夫繊維産業雇用者層, E. 不安定就労年金生活者

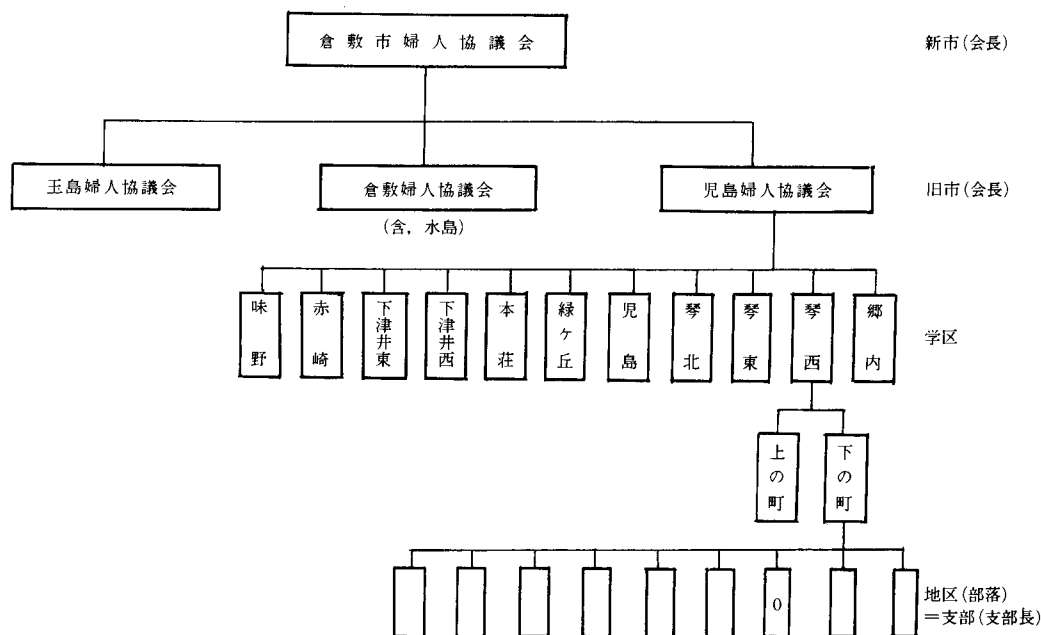
※1 同業者, サークル, 講, 信仰の仲間, 同じ班の向三軒両隣り, 町内会の役員

※2 この人, あそこの家の奥さんはどこからきたとか, 関係がこい。……縁故があるから, うっかりした話をするとつづけ。

的である。また町内から出ていくときは、班内全戸に挨拶するのが普通だが、なかには黙っていく人もある。長い交際の場合には餞別を渡すという。このように、日常生活における近隣のつきあいは親戚づきあいより余程比重が軽い。

しかし、自治会、婦人会といった近隣集団の結束は固い。先に資料を提示したように、児島琴浦地区下の町の地区（部落）は17、各地区が自治会および子ども会、婦人会、老人会そして青年団にかわる消防団等の性・年齢別組織集団をもつ。中心は自治会であり、その年中行事は表16にみるように、老人と子どもに関する行事を中心に近隣の親睦をはかっている。防火・防災や地区清掃の仕事もある。自治会の世帯に、入院手術を要する人が出たときには、部落の氏神、鴻八幡宮のお札を届けるといった配慮もなされている。自治会を中軸とする組織集団の広がりについては表17にみるごとくである。自治会を基盤に多様な機能集団が組織され、さらにその上位集団の組織に組みこまれている構造がうかびあがる。特に○印をつけた役職は○自治会会長が兼任していることからみても近隣集団の中心に位置づく自治会の役割がわかる。そして、たとえば、図6の婦人会の組織図にみるように、自治会以外の組織もほぼ自治会と類似の組織を形成している（婦人会の活動は旧市毎＝玉島、倉敷、児島＝に異なる。児島婦人協議会結成は昭和31年、琴浦町と旧児島市が合併したときである。倉敷市婦人協議会結成は9年後の昭和40年である。現実の活動の単位は○自治会の場合、下の町単位である。活動は学習活動―婦人学級年8回、消費者展、奉仕活動―65歳以上老人友愛訪問、世話活動、おしめたたみ奉仕、敬老の日に記念品、そして旅行など）。

図-6 婦人会組織図



資料：実態調査より作成

表16 自治会の年中行事

月	行 事
1 月	新年会
2～4月	野犬狩り
5月 or 6月	寝たきり老人慰問
5月 or 6月	防火・防災行事(消防団)
6 月	金比羅宮祭典 庚申様(老人会と)
7 月	子ども会(ソフトボール大会)
8 月	盆 おどり
9 月	運 動 会(子ども会) 敬 老 会
10 月	鴻八幡宮大祭山車供奉
12 月	クリスマス会(子ども会)
2ヵ月に1度	地区清掃(川,どぶ,草)
1ヵ月に1度	自 治 会(班長出席)
不 定 期	告別式会葬 入院手術の人に鴻八幡宮のお札 届ける

資料：実態調査より作成

表17 〇地区主体組織団体(昭和58年)

	組 織 団 体 名	役 職 名	備 考	
1	〇自治会	〇会 長	〇自治会副会 長の妻	
2	〇防犯組合	〇組 合 長		
3	環境衛生改善組合	〇組 合 長		
4	鴻八幡宮総代会	〇総 代		
5	〇第一, 第二老人会	会 長(2人)		
6	〇婦人会	会 長		
7	愛育委員会〇支部	支 部 長		
8	〇子ども育成会	会 長		
9	〇消防団	部 長		
10	農業土木水利委員	委 員		⑬の本案
11	児島保護司会	保 護 司		1人は 〇自治会副会 長の妻
12	琴西地区民生委員協議会	民生委員(2人)		
13	上の町・下の町財産区管理会	〇会 長		
14	下の町財産区管理会	〇副 会 長		
15	琴西学区自治通合会	〇会 長		
16	下の町地区自治協議会	〇会 長		
17	倉敷市環境衛生協議会	〇支 部 長		
18	南保健所連絡協議会	〇副 会 長		
19	環境衛生児島地区協議会	〇副 会 長		
20	岡山県環境衛生協議会	〇代 議 員		
21	児島自治連合会	〇理 事		
22	青少年補導センター児島	補 導 員		
23	児島警察署少年警察	協 助 員		

資料：〇自治会総会関係資料より作成(昭和58年)

注：〇印は同一人, 地区理事

表18 自治会の共有財産

1	公 会 堂(100坪, 土地は市有財産の借地)
2	山 車 小 屋(土地は市有財産の借地)
3	山 車
4	下の町の財産区 宅 地 268.33㎡+54.84㎡ 山 林 (野山) 71,583㎡+18,964㎡+4,927㎡+806㎡ 畑 476㎡ 墓 地 218㎡+39㎡
5	下の町・上の町財産区 山 林 (野山) 74,624㎡+74,624㎡+377㎡

資料：実態調査より作成

部落の氏神、鴻八幡宮の祭のときには、まさに地区の近隣集団が総出となる。部落毎の山車（コマのついた山車でダンジリとよぶ）をひくのは子ども会の子どもたちで、その小さい子たちには婦人会のメンバーが付き添う。ダンジリのかじとりは消防団の青年がうけもち、老人会はダンジリの前と後を歩く。そして、自治会は後ろからついて寄附集めを行う。自治会はまた共有財産をもつ。表18は、下の町の地区単位でもつ部落共有財産である。下の町財産区として宅地、山林、畑、墓地を保有し、また下の町、上の町共有財産区として山林をもつ。さらに公会堂、山車小屋、山車をもつ。

さて、以上にその一端をみてきたように、児島下の町O自治会の住民が営む社会関係はまさにムラの社会関係であるが如くみえる。そして、このムラ的社会の支配者が、先の事例⑩や⑦に代表される地域の、そして一族の成功者＝旦那衆である。児島の社会構造は、旦那衆支配をぬきにしては語れない。先にも引用したように、家業的経営の盛衰が刻みこまれる地域にあって、家業的経営の成功者がこの地区の指導者として、ある意味での自治的支配を積みあげてきた。児島では、自治振興委員会という名称の組織が長く市の下部組織として機能してきたが、それは下部組織というより、むしろ市議会等よりも勢力をもつ組織であり、そのリーダー層には家業的経営の成功者が坐っていた。1967年（昭和42年）の対等合併後も、倉敷市の第二、第三議会といった名称がささやかれるほどのかなりの勢力をもったこともあり、1972年（昭和47年）には市から解散命令が下りる。しかし、翌昭和48年には、やはり連合組織が必要ということで、児島の自治会の連合組織、自治会児島連合会が新発足したいきさつがある。そして、自治会児島連合会傘下の各地区の自治会の役員も多くは、この地域社会の中堅どころの企業の経営者層（家業的経営の成功者としての経営者）である。このことは、たとえばO自治会役員のプロフィール（表19）から容易に推測しうる。他地域の役員も同様の傾向を示す。そして、これらの旦那衆は、表20の例にみるように、自治会費や寄附といった自治会活動の物質的基盤の主要な支え手として機能することをとおして、いっそうその地位を固めているといえる。経営者のひとり⑨は法人、いまひとりの経営者⑦と自営業者⑩が一般Aと特別ランクの自治会費をおさめている。一般も又、年額6000円から10000円の層と6000円以下の層に分かれる。6000円以下層の⑫と⑬は家族総所得300万円未満の低所得層である。⑭と⑯は300万円～500万円未満層であり、低所得とはいえないが、⑭は父親が脳血栓で入院中、⑯は転居して日が浅い等の理由にもとづき低い自治会費が許容されている。自治会費については、たとえば⑰の妻が、「所得ではなく、みんなの気持できめる。借家のひとの3000円から10,000万円位までの範囲だけど、大きな会社の社長さんだともっと高い」と発言したことからわかるように、自治会内の暗黙の了解でその額がきまっている。⑰の場合も年金生活者で300万円未満層であるが、「気持」として6000円の自治会費を払っているという。これは、同じく年金生活者で300万円未満層の⑧にもあてはまる。

表19 〇自治会役員プロフィール(昭和58年) 表20 自治会費の内訳

役職	プロフィール	内訳	昭和57年調査対象者世帯の分布	計
会長	宅地建物取引業 (過去に被服工場経営)	法人の部	⑱	1
副会長	N被服社長(⑱)	一般Aの部(1万円以上)	⑦ ⑩	2
副会長	KミシンKK社長 岡山県ミシン卸商協同組合理事長	一般の部	(6,000円~1万円) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑧ ⑨ ⑪ ⑮ ⑰ ⑲ ⑳	13
副会長 (会計)	H染工役員(株主)		(6,000円以下)	⑫ ⑬ ⑭ ⑯
副会長 補佐	T染工専務			

資料：〇自治会総会関係資料より作成(昭和58年)

注：日赤募金、共同募金、年末助け合い等も自治会費から一括払い。

資料：実態調査より作成

表21 自治会費収支予算(昭和58年)

収 入		支 出			
項 目	収 入	項 目	自治会外支出	項 目	自治会内支出
1982年より繰越金	428,820	福祉協議会	75,000	防犯灯料	170,000
自治会費(法人)	700,000	日赤募金	120,000	水道料	10,000
〃 (一般A)	500,000	共同募金	200,000	火災保険料	34,000
〃 (一般)	1,600,000	年末助け合い	60,000	通信費	70,000
雑収入	50,000	環境衛生費	80,000	燃料費	20,000
計	3,278,820	消防団助成金	400,000	事務関係費	30,000
		消防器具積立金	144,000	修理費	50,000
		サイレン新設費	145,000	備品関係費	100,000
		市有財産借地料	60,000	弔慰金	30,000
		祭典費	400,000	会議費	150,000
		計	1,684,000	部会費	100,000
				雑費	200,000
				積立金	200,000
				設備費	50,000
				電気料	70,000
				計	1,284,000

(一戸当たり平均 5,100円)

資料：〇自治会総会関係資料より作成(昭和58年)

(一戸当たり平均 3,900円)

〇自治会の自治会費の収支予算は表21に示すごとくであり、昭和58年現在、年間330万円程度であるが、総会関係資料等においても、法人、一般A、一般と自治会費の内訳が明記されている。その一見、なにげない分類は、しかし、血縁と地縁のネットワークが重層する地域にあって、名望家層=這いあがりの旦那衆をリーダーとする地域社会支配のハイアラーキーの一端を明白に物語るものといえよう。

IV 水島コンビナート建設・三市合併・本四架橋に対する評価

以上、かいつまんでみたように、比喩的にいうならば、いまだイエ的要素とムラの要素

が残る倉敷市児島地区にも、否応なしにさまざまなかたちでその変貌をせまる波が押しよせてきたし、いままた押しよせつつある。

たとえば、はじめにも引用した『児島風土記』等によると、現在の倉敷市児島を含む児島半島は、これまでに四つの転換期をかいくぐって今日にいたったという。第1は、近世における児島湾干拓であり、400年の歳月を要し、児島三白生産の基礎が築かれた。第2は、明治末の宇野の築港、宇高航路の就航、宇野線開通による児島半島縦断であり、以降、塩を主産とする東児島と機業を中心とする西児島（現在の児島地区を含む）に分かれた。三井造船の東児島進出は、先進的な資本主義の地域社会進出という点でも、玉野市の誕生により、児島半島が三市（岡山市、玉野市、倉敷市）一町（瀬崎市）に分解したという点でも大きな影響を及ぼした。第3は、水島コンビナートの建設である。昭和28年のA地区の埋立てに始まり、B地区、C地区（児島の西側）、D地区そして、E地区の造成まで、水島港の築港、南北航路の浚渫は約2300haの漁場の喪失を結果、備讃瀬戸の海上、海底の地区は「残酷なまでに書き改められた」。さらには、1967年（昭和42年）の三市合併を結果した。そして第4は、昭和53年10月起工の本四架橋、瀬戸大橋の建設である。それは、人の流れとしては、近世の帆船時代、金毘羅参詣街道として繁栄した児島（下津井、下村、田之口）が再び四国への要路として蘇生する歴史と指摘しうるかもしれない。しかし、かつての、足で歩く旅が車にとってかわられた現在、児島が単なる車の通過点となる危険性を大きく孕むことも事実として認めなければならない時点にいる。⁽⁶⁾

さて、かような第3、第4の歴史的転換に対して、児島のひとはいかなる評価をよせ、いかに対応しているのだろうか。表22にみるように、児島下の町O自治会の調査対象者は、児島の気質を「働きものだが利己的」(14)「働くことより儲けることばかり考えている」(4)「生活派手だが文化的レベルが低い」(16)などと評している。「全国でも岡山県は利にさとく、しっかりしているという点でひけをとらない。特に児島はひけをとらない」(19)という声に代表される児島の人間は、それ故にこそ、水島コンビナートの建設にはそれなりの賛意を示し、三市合併には反対の意を示す。前者の背後には、働き口の拡大、特に男子の働き口の拡大への評価がある。それは、たとえば、同じく表22の事例⑩の言葉「良かった。働き口ができて良かった。昔から女が縫って男がアイロンでやってきたけど、水島ができて男が働きに出ることができるようになった」や事例①の評価「良かった。若い人が働きに行ける。助かっている人が多い」、事例⑧の評価「良かった。男の人に働き口ができて暮らしが良くなった」等に代表される。調査対象世帯のなかでも⑫は水島コンビナートの最大大手K製鉄勤務であるし、⑪は、二番手のM自動車の第一次下請のNプレス勤務である。また⑬の「息子もK鉄に勤務、水島に住んでいる」。

縫製中心の児島繊維産業は、児島が本社機能を強めつつあることもあって次第に男子従業員の割合を増しつつあるが、しかし、とはいっても、主力が女子従業者であることははっきりしている。水島コンビナートの建設は、男子労働力の吸引という点で大きな期待をもたれたし、事実、通勤可能な水島コンビナートの建設後、労働力の児島から西への移動がはじまった。児島職業安定所の資料をみても、昭和57年春の段階まで、児島の男子は水島

表22 水島コンビナート・三市合併に対する評価等

	水島コンビナート形成に対する評価	三市合併に対する評価	瀬戸大橋の影響	児島の気質・伝統・文化	
経営者層	⑦ 別に感じていない。	良かった。三市が身近に感じられるようになった。	発展していくと思う。		
	⑯ 良かった。働き口できて良かった。昔、女が縫って、男はアイロン。水島できて男は働きに出る。	良くなかった。ボートの収入・利益を倉敷にとられる。市長玉島出身。あつちばかり良くなる。	橋の北の場所(児島)は発展しないというから期待しない。		
自営業者層	⑥ 良かった。みんなの働き口があつてよい。	良くなかった。ボートの売上金倉敷に吸いとられる。倉敷の道路は良くなっているのに児島は悪い。税金も高くなった。	車はよくくがみんな素通りするだろう。交通量が多くなると一寸でるのが大変。	全国でも岡山県は利にさつくしっかりしているという点でひげをとらない。特に児島はひげをとらない。しかし、そのかわりに、一國一城の主でまどまりにくい。あまり文化的でない。 町全体が工場だ。よく仕事する。金もよく使う。いい人が多い。	
	⑩ 別に感じていない。	良くなかった。ボートをとられる。			
	⑫ ?				
夫非繊維産業 雇用者層	① 良かった。若い人が働きにいく。助かっている人多い。	良くなかった。合併しない方がよかった。ボートのことなど。	できてみないとわからないけどよくなると思う。四国へ行くのに便利。児島の商店街はすっかり変わるだろう。		
	② ?	別に感じていない。	倉敷には関係ない。		
	⑨ 別に感じていない。	別に感じていない。	娘が高松にいるので期待していた。		
	⑪		瀬戸大橋など考えると良かったかもしれぬが日常的には不公平。		
	⑮		別に感じていない。	交通量がふえるんじゃないか。人たたくさん来るから商店街よくなるんじゃない。大型スーパーなんか出店するみたいだ。非行とかふえるんじゃないか。	生活が派手。文化レベルが低い。
	⑰ 別に感じていない。	別に感じていない。	交通の便がよくなるのでは?		
	⑲ 良かったか良くなかったか。道路はよくなったが、公害、ぜん息を考えると。	良かった。地域の発展につながる。	交通の便がよくなる。商業も活発に。	お祭りが好き。よその家のことが気になり、干渉する傾向がある。	
夫繊維産業 雇用者層	③ 別に感じていない。	良くなかった。市民税が高くなった。	影響ない。味野の方は変わるかもしれないけど。	内職でみな忙しい。コセコセして落着きがない。セコイ。金回りは良いが、繊維やめたらすることのない町。	
	④ 別に感じていない。	良かった。街は大きくなった方がよい。		よい点・働くのが生き甲斐 欠点・働くこと。儲けることばかり考えている。	
	⑤				
	⑭			働きののだが、利己的。	
	⑮ 良かった。働き口できた。	良くなかった。ボートの収益はとられるし、役場の手続きは面倒になるし。	児島は通過点になるだけ。		
不安定就労年 金生活者層	⑧ 良かった。男の人に働き口ができてくらしが良くなった。		瀬戸大橋ができて、山陽道路ができて、パチンコ屋ができて暴力団が入るし子どもが悪くなる。警戒しない。倉敷・岡山はいいが児島は通過点。わざわざ児島に買物にくる人はいない。購買力はかわらない。		
	⑬		地域にとって影響なし。工事は大手がとってこの地域の業者にメリットない。地場の企業が工事とても値切られてかえって損。		
	⑰ 良かった。息子も川鉄に勤務、水島に住んでいる。	よくわからない。みな話したと良くないとのこと。			

資料：実態調査より作成

のM自動車やSドックそして玉野のM造船や関連企業等に吸引されている。昭和57年春の新規学卒中児島職安管内への就業者145名の内訳は女子が110名で繊維関係の事務へ、男子35名は繊維の営業中心に就職している。一方、県内就職197名の多くは水島、玉野に吸引されている。特に水島が多い。県外へは25名しか出ていない。こうした新卒の就職のみではない。たとえばK製鉄の下請会社が児島で雑役にあたる労働者を組織して、毎日、マイクロバスで送りこむといった例に典型的にみられるように、中高年者の下請、孫下請への吸引が数としてはむしろ多い。しかし昭和57年段階以降、たとえば、K製鉄が男子新規学卒に殆んど門戸を閉ざし、玉野のM造船も急速に求人数を減らしはじめたことに象徴されるように、水島コンビナートや玉野の求人にもかげりがみえはじめていることもたしかである。

後述の論文でみる漁業のマチ、下津井を除くと、風向きによって少し匂う程度で直接的にコンビナート公害を受けない地理的条件にあることも、O自治会の調査対象の好意的なコンビナート受容を結果しているともいえよう。そうしたなかで、毎日、水島のK製鉄へ通勤する事例⑳だけが「良かったか、良くなかったか。道路は良くなったが、公害や喘息を考えると……」とためらいがちに答えている事実にも留意しなければなるまい。

さて、水島コンビナートの好意的な評価に対し、三市合併を「良かった」と評価するものは3事例しかない。8事例がはっきりと「良くなかった」と答えている。合併を評価するものは「地域の発展につながる」「マチは大きくなった方がよい」「三市が身近に感じられるようになった」といった理由をあげる。否定的評価をむけるものなかには児島地区にある競艇場収入の市収入への吸いあげに対する不満、合併後、税金があがったことへの不満がある。「良くなかった。ボートの売上金を倉敷に吸いとられる。倉敷の道路は良くなっているのに児島は悪い。税金も高くなった」(⑥)、「良くなかった。ボートの収益はとられるし、役場の手続きは面倒になるし」(⑬)といった評価が率直に訴える如くである。先の児島歴史年表でみたように、1952年(昭和27年)、児島競艇場が児島湾海浜に開設され、今日まで児島のモーターボートとして名をはせてきた。その収益は、たとえば表23にみるように昭和57年、435億円にものぼっている。開催日144日で入場者数104万人であるから、一日平均の売上高は3億円余にのぼっている。昭和42年の合併時、むこう5ヶ年は児島の独自収入として、あとは倉敷市の収益に一本化することが合併の条件として旧児島市から出されたいきさつがあるのだが、現実には、モーターボート開催日には、児島への狭い道が交通公害といわれるほどの渋滞をおこすこともあり、収益は市に一本化され、公害のみ地区がひきうけるといった不満が、合併後15年余をへた現在もなお児島の住民の心に鬱積しているといえよう。

表23 児島競艇売上高

	開催日数	入場者数	舟券売上高	1日平均売上高	1人平均売上高
1980(昭55)	144日	1,308,611人	53,190,808千円	369,381千円	40,647円
1981(昭56)	144	1,181,906	48,523,161	336,966	41,055
1982(昭57)	144	1,041,112	43,486,380	301,989	41,769

資料：競艇事業局経理課(倉敷市統計書 昭和58年版)

また、その日々の生活行動空間をみても（表24）、その地理的特徴と自動車の普及があいまって、児島の住民のなかには、倉敷市とよりも、むしろ岡山市とのかかわりを深くもって生活するものもいる。特に文化的催しやスポーツ、大きな買物等に関しては岡山市への志向性の強さが目立つ。たとえば、事例⑩の夫妻の場合、倉敷へ出るのは年1度程度なのに対し、岡山市街には月に2度も買物に出かけている。⑬の夫妻も倉敷に週1度、岡山に月2度の頻度で買物や遊びに出かけている。特に音楽会で岡山へ出かけることが多い。④の長男とその妻も月1回、倉敷に買物、遊びに出かけるが、岡山へは月に2度は買物や音楽会に出かけるという。こうした行動空間の特徴も三市合併への否定的評価につながっているといえよう。

それでは、いま、児島がむかえる第4の大きな変化、本四架橋、瀬戸大橋についてはいかなる評価を下しているのであろうか。評価は大きく二つに分かれるが、否定的評価を下すものの方が多い。それは、たとえば「瀬戸大橋ができて、山陽道路ができて、パチンコ屋ができて暴力団は入るし、子供が悪くなる。賛成しない。倉敷、岡山は良いが児島は通過点、わざわざ児島に買物に来る人はいない。購買力はかわらない。」（事例⑧）、「車はよく通るがみんな素通りするだろう。交通量が多くなると、ちょっと出るのが大変だ」（事例⑥）「児島は通過点になるだけ」（事例⑮）といった評価で、単なる通過点となり、地域に交通渋滞をもたらす以外、何のメリットもないことを危ぶむ声が強い。肯定的評価としては、「交通の便がよくなる。商業も活発に」（事例⑳）に代表される声である。「交通量が増えるんじゃないか。人が沢山来るから商店街がよくなるのではないか。大型スーパーなんか出店するみたいだ」（事例⑯）と期待をよせつつも「非行とか増えるのではないか」と危惧をもつものもいる。さらにはまた、より安い労働力を雇用しうる香川県あたりに縫製工場の主軸が移転する可能性等を危ぶみつつも、瀬戸大橋のたもとに大きな繊維センターを作る計画等も地域の中小企業の経営者や自営業層の間でかわされているという。⁽⁷⁾

表24 行動空間（地域×頻度）

ケース番号	児島市街	倉敷駅前	倉敷新市街	水島市街	玉島市街	玉野市	総社市	岡山市街	車の有無
経営者層	⑦ 長男 ed 一仕事 嫁 1/W 一仕事買物 姉 2.3/W 一買物		長男 1/m 一買物 嫁 1/W 一仕事, 買場 姉 2.3/W 一買物	長男 1/W 一仕事	長男 1.2/m 一友人				有
	⑧ 妻 1.2/W 一買物, 病院支所	婿 ? 一病院見舞	婿 ? 一役所, 会合	婿 ? 一親類	婿 ? 一親類	婿 ? 一仕事	婿 ? 一仕事	妻 4/y 一買物, 病院	有
自営業者層	⑥ 夫 ed 一買物 妻 3.4/W 一病院 長男 1/W レジャー 嫁 1/W 一買物	夫 1/m 一病院 妻 2/m 一病院 長男 1/m レジャー 嫁 3/m 一病院, 買物, 子供と遊び		長男 1/m 一買物		長男 2.3/y 一釣, 海水浴 嫁 10/y 一買物, 海水浴		長男 1/y 一ふらっと 嫁 1/m 一仕事の講習, 友人	有
	⑩ 夫 2/m 一親類 妻 2/m 一親類	夫 1/y - ? 妻 1/y - ?		夫 1/y - ? 妻 1/y - ?		夫 1/m 一稲荷 妻 1/m 一稲荷	夫 2/m 一買物 妻 2/m 一買物		有
	⑫ (夫89才, 妻86才の高齢者)								なし
非繊維産業 雇用者層	① 妻 1/m 一買物	長男 ed 一仕事				夫 ed 一仕事 妻 3.4/y 一買物		妻 3.4/y 一買物	有
	② 妻 1/W 一買物		妻 ? 一買物	長男 6/W 一仕事					有
	⑨ 夫 6/W 一仕事 妻 3/W 一仕事(集金)	夫 2/y 一映画, スポーツ 妻 1.2/y 一買物			妻 2.3/y 一妹	妻 1/y - ?		夫 3/y 一スポーツ見に行く 妻 1/y 一買物	なし
	⑪ 夫 1/W 一食事, 飲み 妻 3.4/W 一買物	夫 2.3/y - ? 妻 2.3/y - ?		夫 1.2/W 一仕事					有
	⑬ 夫 1/W 一買物 妻 1/W 一買物	夫 1/W 一買物, 遊び 妻 1/W 一買物, 遊び					夫 2/m 一音楽会, 買物 妻 2/m 一音楽会, 買物		有
	⑭					夫 6/W 一仕事			なし
	⑳ 夫 2/W 一買物, 親類 妻 2/W 一買物, 親類	妻 2.3/y 一買物	夫 2/y 一買物 妻 2/y 一親類	夫 5/W 一仕事, 買物 妻 1/m 一買物				夫 4.5/y 一親類, 買物, 展示会 妻 4.5/y 一親類, 買物, 展示会	有
繊維産業雇 用者層	③ 嫁 1/m 一買物	嫁 1/m 一買物 長女 4/m 一買物						嫁 5.6/y 一買物, 遊び 長女 ? 一映画, 買物	有
	④ 妻 1/m 一支所 長女 1/m 一買物 長男 1/W 一買物 嫁 1/W 一買物	長男 1/m 一買物, 遊び 嫁 1/m 一買物, 遊び					妻 2/y 一買物 長男 2/m 一買物, 音楽会 嫁 2/m 一買物, 音楽会	有	
	⑤ 夫 6/W 一仕事								不明
	⑬ 夫 6/W 一仕事					妻 1/y 一親類		長男 ed 一学校	有
	⑮ 夫 2/m 一買物 妻 1.2/m 一買物, 支所 次女 2/m 一買物, 支所	夫 1.2/m 一買物						夫 1/m 一娘の家へ 妻 1/m 一娘の家へ 次女 2/m 一友人, 買物	不明

資料：実態調査より作成

注：ed＝毎日，1/W＝週1度，1/m＝月1度，1/y＝年1度，また⑬の夫は久米南町に住み込み

結びにかえて

小論のはじめにおいて、現段階における倉敷市児島地区の特徴について叙述したとき、縫製を中心とする繊維産業のまちとしての児島、縫製業従事を中心に自営業者や家族従業者の割合の高い地域である児島、中小規模の工場で働く労働者のなかでも女子労働者、特に近年では既婚の女子労働者の割合の高い地域、児島についてふれた。このことは、当然に、多就業、とくに共働きの形態をとる世帯の割合の高さにつながる。そして又、自営業者層や中小企業の経営者層の割合の高さは、家業や家産の継承を基礎に直系家族の形態をとる世帯の割合の高さを結果することにもふれた。なによりも、この地にはりついて、あるいはまた、中・四国等から出稼ぎ等を契機に移住して後、盛衰をくりひろげる地域産業と格闘しつつ、生活防衛の営為を重ねてきた、いわゆる地づきの層の層の厚さにもふれた。

本論において分析の対象とした児島下の町O自治会第一班の各世帯が示す諸特徴は、まさしく、児島の地域的特徴を典型的に示すものであった。

そこには、第1に、塩田と機業から縫製中心の繊維産業へ、さらには非繊維産業部門の拡大と変化をみせてきた地域産業変動の波にもまれつつ、その生活を支える生業を大きく変貌させてきた地域住民の生活防衛の仕組が明らかとなった。調査対象者の親の代の塩田、農業、機業は、子の代においては、おおむね、縫製、織物、染色を中心とする繊維産業へと移り、さらに現在、既婚女子を中心とする繊維産業従事のかたちをのこしつつ、玉野のM造船やM金属、水島コンビナート建設にともなうK製鉄やM自動車の進出を契機に、非繊維の重化学工業従事等を模索という特徴をみせる就業構造の変化である。そこには、基本的には日本資本主義の発達に規定されつつ、あるときには主体的に、あるときには否応なしに、自らの生活を防衛してきた地域住民の累重的な生活史がうかびあがった。

ところで第2に、地域住民の生活の仕組についてみると、歴史的にみても、又、現時点で把握しても、世帯員総働きの多就業構造と長時間労働という二つの仕組を抜きにしては、これを把握しえないことがあきらかになった。単身世帯を除く全事例が多就業世帯である事実、しかも、その生活史を逆のぼった把握から推しても多就業が一般化していた事実は、日本の資本主義発達の基礎をなした軽工業の、その中軸をしめる繊維産業が、男女を問わずきわめて安価な労働力を基礎にして成立した歴史的事実を世帯単位の生計収支の面から裏づけるものといえよう。そしてまた、現在、100名内外の従業員を雇用する中小企業の経営者も、20～30年前には夫婦共働きの自営業者であったこと、その家業的経営成功の連続線上に、地域の、そして一族の成功者としての経営者層が形成されてきたという事実も把握された。同時にまた、これら中小企業経営者層や自営業者層を中心に、この地において、いまなお、家を本拠とする縫製業従事の形態が多く、それらの層を中心に血縁と地縁のネットワークの重層的な重なりがみられることも摘み取られた。

そして第3にこれら、直載に表現するならば這いあがりの地域名望家層とでも名づける家業的経営からの成功者をリーダーに形成される地域社会のハイアラーキーの構造を明確に把握しえた。それは、地方自治体の下部組織としてのかたちをとりつつ、ときには、地方自治体の手綱さばきを超越する圧力団体としての力をも発揮する地域組織集団＝自治会

を基礎とする地域社会支配の構造であった。名望家層支配を支える基盤は、一方では血縁と地縁の強固なネットワークの存在であり、他方では、自治会費、諸行事寄附等、地域活動の経済基盤の中心的担い手としての役割を果たす行為にもとめられる現実もうかびあがった。自治会を中心に、子ども会、老人会、婦人会、消防団等の性・年令別集団が協力して祝う年一度の地区（部落）の氏神の祭りの存在、部落有財産区の存在、古くからの家を中心に組織されたお太子講の存在と実際に葬式時に果たす機能等々に地域名望家層支配の構造を加えてみるならば、さらには、地域内における血縁と地縁のネットの重層的構造も加えて考えるならば、人口40万をこえる倉敷市の一面をしめる児島下の町の地域社会にみる共体的・ムラの社会関係の存在を指摘せざるをえなかった。

第4に、このイエ的要素とムラの要素が根づよく残る児島の地に、否応なくおしよせつつある変動要因のなかから、水島コンビナート建設、三市合併そして本四架橋を選び、これらの施策に対する評価を中心に展開、「利にさとい」児島の人間のきわめて現実的な評価と行動がうかびあがった。それらは、「児島から繊維をとったら何もない」「繊維をやめたらすることのない町」と住民自らが言明する地域、児島の住民が、合併後16年余をへた今日の時点において、いまなお、行政都市「倉敷」の市民としての意識より、自然都市「児島」の住民としての意識を色濃くのこしつつも、日本の資本主義発達の影響下にあつて常時、新しい地域産業を模索してきた、したたかな進取の気性をもって、繊維産業不況、鉄を中心とする重化学工業不況のなかでの、地域の、そして各イエのあらたなる対応を模索している行動と意識のあらわれである。同時に、地域産業そして地域社会の漸次的変化に対応しつつ、その行動や意識を漸次的に変容させつつある過程にあることをも教えるものといえよう。

〈注〉

- (1) 倉敷市歴史年表編集委員会『倉敷市歴史年表』昭和53年所収の町村合併表並びに倉敷市合併表（75～79頁）による。
- (2) 二つの年表の記載事項に年号等の相違がみられるときには、出典が明記されている略年表によった。なお、表記等の簡略化を試みている。下の町にかかわる歴史を中心にまとめたが、必要な限りにおいて児島全体にかかわる事項を抜粋した。
- (3) 児島地区の学卒労働力の吸引は、中卒のピークが昭和37年、高卒のピークが昭和42年であった。地元の高卒者は現場で働く気持がなく事務系を希望するため、近畿、中国、四国、九州の学校や地区単位の求人が児島労務対策協議会と職業安定所によってなされた。求人を中心に中卒であった段階では定時制高校入学の魅力をかかぎ求人にあたり、主力が高卒者に移ってからは短大（昭和49年発足、幼稚園2級免許と保母免許取製の公立2部の短大）入学、資格取得可能の魅力による求人を手がけた。短大作成の要覧のほかに、児島労務対策協議会作成の短大要覧があることからみても、労働力確保のための短大であることがわかる。公立2部の保母養成は全国でも稀なケースであり、多くの学生は出身地にかえって実習を行い、出身地で就職という道を選択するよう指導される。昭和57年段階で入学金15,000円、授業料月3000円、学生の多くは日中、工場で働く。中卒、高卒者の初任給は全職同盟の基準に1000～2000円位上のせした額である。児島の繊維関連企業中30数社が全職同盟に加盟、ペア等、一本化してきめている。未加盟の企業もおおむね全職同盟の水準にならう傾向がみられる。

(4) 角田直一著の『児島機業と児島商人』昭和50年)には、児島地域社会に輩出した機業主と商人の「栄えと滅び」のはげしい歴史が書きこまれている。日本の繊維産業の歴史に燦然とのこる下村紡績所ひとつをとってみても、先の年表に書きしるしたごとく、下村紡績株式会社→愛媛紡績株式会社下村支店→近江帆布下村工場→琴浦紡績株式会社(竹村綿業株式会社の経営)をへて備前棉業株式会社に売却され、近年、竹村綿業株式会社の下村工場長石田氏がゆずりうけ、現在、その嗣子が経営と、倒産と売却の波に翻弄されつつ、現在なお、その創業当時の建物をのこして操業という有為転変をたどっている。

日清、日露戦時以降の大陸向商品、韓人紐や腿帯子はいずれも児島のひとの手による創出であり、また児島商人によりその輸出も試みられた。

ついで、黒色硫化染料の試作、洋燈芯の製造、足袋の縫製、特に動力ミシンを使つての足袋縫製の開発等も児島の人間の工夫である。

この足袋縫製業が次第に衰退にむかう大正末年、機をみるに敏な児島機業の多くは逸早く被服縫製、布綿工業に転換する。その中心は学生服であり、長年にわたつてこの地に蓄積されていた足袋の裁断、縫製技術、伝来の販路をいかし、児島はたちまちにして学生服のメッカに変容する。雲齊足袋地による学生服の縫製、出機種の採用、戦後における合繊合理化等々、児島は常に学生服生産のトップに位置してきた。

しかし、その過当競争が、学生服の老舗西原本店の倒産を結果したことに象徴されるように、学生服生産もまた曲がり角に立ち、作業服、紳士ズボン、カッターシャツ、体育衣料、ジーンズ、カジュアル製品等々、多品目、少量生産のかたちへの移行が模索されつつ、今日にいたつた。

このように、児島の繊維産業の歴史をとおして、時代を先取りした創意工夫によって地域産業振興の索引力となった自営業者層や中小企業経営者層の姿と同時に、過剰生産と消費動向の変化に翻弄されて、倒産、転落の悲哀をかみしめざるをえなかつた自営業者層や中小企業経営者層の姿がうかびあがる。

(5) 事例⑱と事例③④は兄弟である。③④は⑱の工場の従業員として働く。事例⑦は同じ下の町内の本家(男物専門の被服工場経営)から分家した。事例⑳は高卒後、水島コンビナートのK製鉄に勤務、現在にいたるが、父親は同町内にて、T・K被服の経営主である。㉑は次男、長男も大学卒業後、岡山市において会社員として働いている。

(6) 倉敷の自然をまもる会『児島風土記』458頁～461頁、昭和57年。

(7) 倉敷市児島のジーンズ・メーカーB社の業務部長K氏からの聴取による。

参考文献

児島市役所、『児島市勢統計』、昭和41年

角田直一、『下村紡績所』、瀬戸内海文化連盟、昭和44年

角田直一、『児島の日本一物語』、児島ライオンズクラブ、昭和46年

角田直一、『児島機業と児島商人』、児島青年会議所、昭和50年

原 三正、『児島歴史散歩』、児島ライオンズクラブ、昭和52年

倉敷市歴史年表編集委員会、『倉敷市歴史年表』、倉敷市教育委員会、昭和53年

倉敷の自然をまもる会、『児島風土記』、倉敷の自然をまもる会・倉敷市文化連盟、昭和57年

倉敷市、昭和58年版『倉敷市統計書』、昭和59年